

# 多文化共学短期〔派遣〕留学プログラム 2019 年度実施報告書

タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール  
ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール  
インドネシア大学スプリングスクール

アジア研究教育ユニット (KUASU)  
国際高等教育院 (ILAS)



# 目次

はじめに.....	iii
1 多文化共学短期留学プログラム.....	1
1.1 概要.....	1
1.2 多文化共学短期留学プログラム準備.....	2
1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講.....	2
1.2.2 情報共有.....	2
2 実施状況.....	4
3 チュラーロンコーン大学サマースクール.....	6
3.1 実施体制.....	6
3.2 募集要項とポスター.....	7
3.3 研修日程.....	11
3.4 参加学生一覧.....	12
3.5 タイ語会話教室.....	13
3.6 共同発表.....	14
3.7 担当教員所感.....	16
3.8 参加学生報告.....	18
4 ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール.....	31
4.1 実施体制.....	31
4.2 募集要項とポスター.....	32
4.3 研修日程.....	36
4.3 参加学生一覧.....	37
4.5 ベトナム語会話教室.....	38
4.6 共同発表.....	40
4.7 担当教員所感.....	41
4.8 参加学生報告.....	45
5 インドネシア大学スプリングスクール.....	53
5.1 実施体制.....	53
5.2 募集要項とポスター.....	54

5.3	研修日程.....	59
5.4	参加学生一覧.....	59
5.5	インドネシア語会話教室.....	61
5.6	共同発表.....	63
5.7	担当教員所感.....	64
5.8	参加学生報告.....	66

## はじめに

今日、大学における研究・教育はますます国際化が進んでいます。京都大学でも、「京都大学ジャパングートウェイ構想」に基づいて世界トップレベルの大学との留学生交流が展開されております。京都大学アジア研究教育ユニットも、その一端を担うプログラムの提供・実施をおこなっており、東南アジア諸国への学生派遣を進めてきました。



2019年度も昨年度に引き続き、タイ・チュラーロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校（人文社会科学大学と外国語大学）、インドネシア大学の3国の諸大学への派遣プログラムを実施しました。今年度は計27名の京都大学学部生・大学院生の短期派遣をおこない、2013年度から2019年度までの派遣学生数の合計は158名に至りました。本報告書は上記プログラムの今年度の実施体制・内容、プログラム担当教員の所感、学生の報告書などを掲載しています。

本派遣プログラムでは、京都大学で全学的に参加者を募集しており、さまざまな学部・研究科から多様な興味・関心を持つ学生が参加しています。本年度は、タイには10名、ベトナムには7名、インドネシアには10名の学生を派遣することができました。これらの派遣プログラムの目的は、派遣先大学での交流や文化体験を通して、日本/東南アジアを新しい視点から見つめなおし、日本/東南アジアの社会・文化の理解を深めることです。派遣先大学では、語学力・コミュニケーション能力を伸ばしつつ、派遣先大学での学習や現地の大学生たちとの交流を通じて、異なる文化・社会での生活を体験するとともに、日本/東南アジアに関する国際的な見方を身につけるための様々な機会が提供されます。

平成31年度は、新型コロナウイルスの流行のため、春に実施したインドネシア大学派遣は緊張感をもった実施となりましたが、結果的には大きな問題を抱えることなく全ての派遣プログラムを終了することができました。これら派遣プログラムを無事に実施できたのは、派遣先大学のプログラム担当教職員との連携体制や、様々な危機管理体制を整備してきたからこそでしょう。国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（旧国際交流センター）と京都大学アジア研究教育ユニットが連携大学と共に積み重ねてきた数多くの学生派遣の実績が安定した交流の確かな基盤を作り上げてきたことを嬉しく思います。

プログラムの実施にあたっては今年も多くの方々にご尽力いただきました。国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターの諸先生方、アジア研究教育ユニットの先生方、教育推進・学生支援部国際教育交流課交流支援掛の事務の担当者、アジア研究教育ユニットの事務の担当者、派遣先大学における教職員の方々、およびサポート役を務めてくれた派遣先大学の学生たち。今年度の3つの派遣プログラムは、こうした皆様のご支援とご協力なしに成り立ちませんでした。この場を借りて心より感謝申し上げます。

2019（令和2年）年3月  
京都大学アジア研究教育ユニット  
ユニット長 落合 恵美子

# 1 多文化共学短期留学プログラム

## 1.1 概要

多文化共学短期留学プログラムは、京都大学アジア研究教育ユニット（以下、KUASU）と国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（以下、日・日センター）が主体となって展開しているプログラムである。東アジアおよび東南アジア諸国連合におけるトップクラスの諸大学と京都大学との間で短期学生派遣／受入をおこなっている。本報告書は、そのうちの東南アジアへの派遣プログラムについて報告するものである。

2017年度より、東南アジアへの派遣プログラムは、京都大学が全学として実施する事業（以下、全学事業）の一つと見なされることになった。実施主体は、上記の KUASU と日・日センターであることに変化はないものの、京都大学重点アクションプランによる費用補助、全学的広報促進等、全学事業としての支援を得られることとなった。

実施主体の一つである KUASU は、平成 24 年度から開始された文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト（『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成）を推進する母体となってきた。KUASU を構成するのは、文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際高等教育院、東南アジア地域研究研究所、人文科学研究所、経営管理研究部である。

これまで本プログラムは SEND プログラム（*Student Exchange - Nippon Discovery Program*）と呼ばれてきた。多文化共学短期留学プログラムは、SEND プログラムと同様、日本文化、日本社会を「外」の視点から捉えなおすことによって、アジア（および世界各国）と日本とのあいだの相互理解の促進と、互いに共通する課題の発見・解決を目指すことを主眼としている。

本報告書では、KUASU と日・日センターを主体としておこなった、令和元年度の派遣業について報告する。表 1 の 3 件の短期派遣プログラムを実施した。

表 1 本報告書で扱う短期派遣プログラム一覧

形態	プログラム名称（実施期間）	対象国
派遣	「タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール」 （令和元年年 9 月 1 日 ～ 9 月 14 日）	タイ
派遣	「ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール」 （令和元年 9 月 8 日 ～ 9 月 22 日）	ベトナム
派遣	「インドネシア大学スプリングスクール」 （令和 2 年年 2 月 16 日 ～ 3 月 1 日）	インドネシア

## 1.2 多文化共学短期留学プログラム準備

### 1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講

本プログラムに参加する京都大学の学生は、プログラム内で日本語・日本文化についての解説や考察をおこなう。派遣プログラムでは、京都大学学生が主体となって派遣先大学でそれを実践する。一方、受入プログラムでは、短期交流学生（＝受入留学生）が主体となって京都大学で解説・考察をおこなう。派遣／受入のどちらにおいても、日本人学生と外国人学生との共学が基盤となる。その実践に必要となる京都大学学生の能力を養成するため、平成25年度から日・日センターの教員が中心となってリレー式に担当する「日本語・日本文化演習」（全学共通科目：キャリア群）が毎年度開講されている。その概要は、次ページの表2にしめすシラバスの通りである。

### 1.2.2 情報共有

インドネシアのプログラムの実施前および実施中、以下の図1にしめすような連絡体制をとった（図中の矢印は情報の行き来をあらわしており、太線はプログラム担当者が関わる連絡、細線は学生どうし、あるいは学生からの連絡をあらわす）。

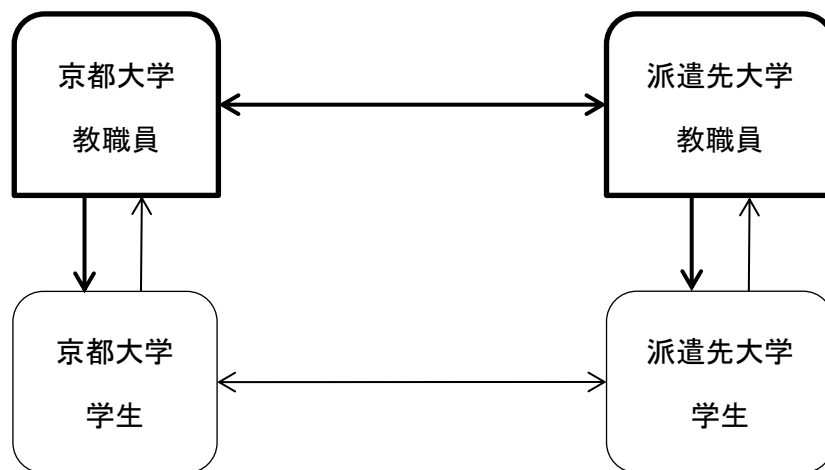


図1 情報共有体制の概要

表2 平成31年度「日本語・日本文化演習」シラバス

授業科目名、英訳	日本語・日本文化演習 Japanese Language & Culture		担当者 所属 職名・氏名	前期： 国際高等教育院 教授 河合 淳子 特定准教授 佐々木幸喜 特定助教 西島薫	後期： 国際高等教育院 教授 河合 淳子 教授 長山 浩章 特定准教授 佐々木幸喜
群	キャリア群	分野（分類）	その他キャリア形成	使用言語	日本語／英語
単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度	2019 前期／後期	配当学年	全回生	対象学生	全学向
曜日時限	火2／水4	教室	吉田国際交流会館 第5講義室・共東21		
<b>授業の概要・目的</b>					
<p>本授業では、まず講義で日本語や日本文化の特徴、およびその様々な検討方法を学ぶ。その際、日本文化を広義に定義し、その範囲に日本社会の状況、社会問題をも含んで講義を進めていく。そして、日本語、日本文化、日本の社会状況を紹介する経験とその準備を通して、日本人学生と留学生が共に、日本語、日本文化、社会状況ならびに自分自身が身につけてきた言語や文化、そして自分自身が育ってきた社会の特徴を再発見することを目指す。そして、その過程を通じて、グローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。</p>					
<b>到達目標</b>					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語、日本文化、日本の社会状況ならびに自分自身が身につけてきた言語、文化を捉える多様な視点を学ぶこと。</li> <li>・日本語、日本文化、日本の社会状況を紹介し、異なる文化的背景を持つ学生間で議論を行うことによってグローバルな視野に立った物の見方・考え方を身につけること。</li> <li>・母語とは異なる言語による、より効果的なプレゼンテーション及びディスカッションの技法を習得すること。</li> </ul>					
<b>授業計画と内容</b>					
<p>多様な文化を有する人々との交流の中で、自国文化や社会的状況を多面的に理解し紹介できることが要請される場面は多い。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って他者と見方や考え方を共有できるようなることを目的に、講義を中心としながら、演習・討議を交えて進めていく。</p> <p>講義担当（予定）          1回目 オリエンテーション &lt;講義担当：河合、長山（後期）、佐々木、西島（前期）&gt;          2回目～7回目&lt;講義担当：河合、佐々木&gt;          日本語の特徴－（講義）          言語の機能と文化－（講義）          日本語、日本文化、日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習）          8回目～13回目 &lt;講義担当：河合、長山（前期）、西島（後期）&gt;          世界の中の日本文化、日本社会の特徴―何をどう伝えるか―（講義）          日本文化、日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習）          14回目 &lt;講義担当：ルチラ、長山、河合、家本（前期）&gt;          プレゼンテーション</p>					
<b>教科書／参考書等</b>					
プリントを配布する／授業中に紹介する					
<b>授業外学習（予習・復習）等</b>					
実習、プレゼンテーションの準備として段階を追って随時課題が出される。各自、積極的に準備を行うことが求められる。					
<b>その他（オフィスアワー等）</b>					
<p>海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。</p> <p>大学間交流協定による短期留学プログラム（東アジア）、ASEAN 短期留学プログラム参加のための推奨科目となっている。</p>					



共有した情報の内容としては、以下のものがあげられる。

- 教職員－教職員間： プログラムの運営に関する教務的情報と一部の事務的な情報
- 教職員－学生間： プログラム内容に関する教務的な情報
- 学生－学生間： 共同学習に関する情報、プログラム内容に関する事務的情報

情報共有のためのツールとしては、以下のものがあげられる。

- 電話： 学生－学生間以外で使用
- Eメール： 学生－学生間以外で使用
- LINE： おもに学生－学生間で使用（一部、教職員－学生間でも使用）
- 他のSNS： おもに学生－学生間で使用

また、緊急連絡網を作成し、教職員間での危機管理体制の整備に努めた。緊急連絡網には、i) プログラムの日程表、ii) 参加者の利用フライト情報、iii) 参加者名のリスト、iv) 京都大学を含む各大学の緊急時連絡窓口、v) 参加者の宿泊施設情報、vi) 大使館・領事館情報等を載せた。

今回初の試みとして、インドネシア大学スプリングスクールにおいて（株）グローバルに学生のビザ取得（B211A）の代行を依頼した。具体的には、一部の申請書類作成とインドネシア共和国在東京大使館でのビザ申請の代行を依頼した。背景的な状況としては、2018年度からインドネシア大学が留学生に対して社会文化ビザの取得を義務化したことがある。インドネシア派遣に関しては、今後は社会文化ビザ取得が必須になると考えられる。今後は状況の変化によって、留学ビザの取得が義務付けられる可能性も考慮する必要があるだろう。

また、今年度のインドネシア大学スプリングスクールは、新型コロナウイルスの影響を見極めつつ、開催の可否について担当の教職員の間で検討を重ねた。またプログラム終了後は、参加学生には健康に留意する旨を伝えたほか、インドネシア大学にも帰国後の学生の体調の変化について情報共有する旨を伝えた。

## 2 実施状況

令和元年度派遣プログラムへの学生の参加状況、費用補助状況の概要について述べる。費用の面から、短期派遣の京都大学学生の修学を支援する体制には、以下の三種類がある。

- ① 機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成－京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム－」による基幹経費  
(京都大学)
- ② 京都大学重点アクションプラン (京都大学)
- ③ JASSO 奨学金 (HTA1814301004 : 多文化共学短期[派遣]留学プログラム)  
( (独) 日本学生支援機構 )

以下の表 3 では、基本情報（実施期間・応募・参加学生数）、費目別の費用補助該当者数（学費・渡航費・宿泊費）、奨学金受給者数（JASSO 奨学金）、各項目の合計人数を、上記 ①～③ による費用負担の該当是非と合わせて示す。

表 3 2019 年度派遣プログラムの実施状況概要

	タイ・チューラーロンコーン 大学サマースクール	ベトナム国家大学 ハノイ校サマースクール	インドネシア大学 スプリングスクール	計
実施期間	令和元年 9月1日～9月14日	令和元年 9月8日～9月22日	令和2年 2月16日～3月1日	
応募学生数	10名	7名	10名	27名
参加学生数	10名	7名	10名	27名
学費補助	①②10名	0名	① 10名	20名
渡航費補助	②10名（一部）	①②7名	② 10名（一部）	27名
宿泊費補助	0名	0名	0名	0名
チューター費	①10名	①7名	①10名	27名
業務委託	なし	なし	あり（補助0名）	0名
JASSO 奨学金	③2名	③4名	③ 6名	12名

### 3 チュラーロンコーン大学サマースクール

#### 3.1 実施体制

チュラーロンコーン大学 (Chulalongkorn University [CU])

実施責任者

Chomnard Setisarn 文学部東洋言語学科日本語講座・助教授

担当教職員

Panlanan Thananchai 文学部東洋言語学科日本語講座・助手

京都大学

実施責任者

落合 恵美子 大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授

安里 和晃 大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット・准教授

担当教職員

河合 淳子 国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター・教授

西島 薫 学際融合教育研究推進センター・特定助教

### 3.2 募集要項とポスター

京都大学多文化共学短期[派遣]留学プログラム

## 2019年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクールのご案内

Summer Intensive Course for Thai Language and Culture

2019

**申 込 締 切： 2019年 6月10日（月）正**

#### 【日程】

2019年

9月1日（日） タイ・バンコク都到着

9月2日（月）～9月13日（金）：講義および研修（於チュラーロンコーン大学）

9月14日（土） 帰国

#### 【プログラム概要】

本プログラムは、タイ王国で最も古くに設立された、伝統あるチュラーロンコーン大学において、タイ語学習および文化についての講義、タイ文化体験、タイ語母語話者との日本語も交えた交流と 発表討論、実地研修等の機会を提供します。タイの言語、文化、社会、歴史等について知識を深める とともに、高度な異文化理解・交流が得られます。

#### 【募集詳細】

募集人数： 10名程度

募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および正規の大学院生

（大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属の者を優先する）

応募条件： 異文化体験・異文化学習に意欲を持つ者

#### 【費用】

参加費用： 約12万程度※（学費、宿舎費、渡航費を含む）

※為替レート、参加人数によって変動します。

自己負担： 国内移動費、食費、個人的な諸費用

大学が定める海外留学保険加入費用

（全員必須、治療・救援費用無制限）

※ 最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します。

#### 【奨学金】

JASSO 奨学金：70,000円（若干名）

※JASSO の支給要件を満たす者（日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、

成績・所得の基準を満たす者等）のうち、若干名に限ります。

## 【申込】

1. オンライン申請をおこなう（オンライン申請の手順については【別紙】参照）

オンライン申請は下記 URL より行って下さい。

<URL>

<https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjmel1pepbt9/hbbQ7J/login.html>

※ログイン ID 及びログインパスワードは国際教育交流課に取りに来てください。

※http の後ろに必ず、s を入力してください。

2. 以下の書類を下記の申請書類提出先に提出する

- a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの

- b. 応募申請書（書式 1-1）

- c. 語学力証明書（語学試験（英語）のスコアコピー）

※スコアコピーがない方は締切の 2 週間前までにメールで相談すること。

（2 週間を切っている場合は直ちにメールで相談してください。）

- d. 成績証明書

- e. 志望動機（書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4 1 枚程度）

- f. 海外留学誓約書

- g. パスポートの顔写真ページのコピー（有効期限は入国時 6 ヶ月以

上必要。未取得者はその旨申し出、早急に取得）

- h. 提出物チェックリスト

### (注) JASSO を希望する方へ

JASSO 奨学金を希望する方は別紙「JASSO 海外留学支援制度 奨学金申請について」をご覧の上、国際教育交流課海外留学掛 青木までメールでご連絡ください。申請に必要な書類について案内します。

E-mail : [ryuga-east.asia@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:ryuga-east.asia@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

メールタイトル：『2019 タイ・チュラサマーJASSO 希望』

本文：学部/修士、所属部局、学籍番号、学年、名前を明記のこと。

募集要項確認、各種書類は下記 URL からダウンロードしてください。

<アジア研究教育ユニット><http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/>

<KULASIS> <https://www.k.kyoto-u.ac.jp/student/>

全学生向け共通掲示板→【留学情報はこちらを Click】

申請書類提出先：教育推進・学生支援部 国際教育交流課海外留学掛

075-753-2488

（吉田本部構内 教育推進・学生支援部棟 1 階 国際教育交流課）

【選考】 書類審査および面接によりおこなう。

【募集・選考スケジュール】

申込締切：2019年 6月 10日（月） 12:00（正午）  
面接： 2019年 6月 19日（水） 17:30-18:30（講義室1）  
6月 20日（木） 12:10-12:50（講義室1）  
17:30-18:30（講義室1）

上記日程のうち1人 10分程度（講義室は吉田南構内 吉田国際交流会館内）

最終結果通知：2019年 6月 21日（金）

オリエンテーション：2019年 6月 28日（金）12:10-12:50（講義室1）（出席必須）

海外渡航安全説明会：2019年 6～7月予定（出席必須）※決まり次第通知。

【備考】

- ・本プログラムは以下の機関・事業により一人当たり計7万円の援助を受けて行われます。
  - （1）京都大学アジア研究教育ユニットによる支援
  - （2）京都大学重点アクションプランによる支援
- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めない。
- ・国際高等教育院附属 日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2019年度前期：金曜3限）を受講した上での参加を推奨している。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがある。
- ・海外旅行傷害保険については、指定の保険プランにご加入いただきます。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」（アジア研究）の単位に充当され得る。
- ・本プログラムは『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成から京都大学アジア研究教育ユニット、京都大学重点戦略アクションプランによって引き継がれた 支援体制のもとでおこなわれます。

# タイ・チュラーロンコーン大学 サマースクール

## Summer Intensive Course for Thai Language and Culture

### 2019

プログラム日程：2019年9月1日（日）～ 9月14日（土）

説明会：2019年5月17日（金）12:10~12:50 @吉田南構内 吉田国際交流会館講義室4

#### 【プログラム概要】

タイ王国で最も古くに設立された、伝統あるチュラーロンコーン大学において、タイ語学習および文化についての講義、タイ文化体験、タイ語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、現地研修等の機会を提供する。タイの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流が得られる。

#### 【詳細】

- ・募集人数：10名程度
- ・研修内容：タイ言語文化講義、学生交流、現地研修、発表討論
- ・募集対象：京都大学に在籍する正規の学部生および正規の大学院生  
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先する)
- ・費用：  
参加費用：約12万程度（学費、宿舎費、渡航費を含む）

自己負担：国内移動費、食費、個人的な諸費用、大学が定める海外留学保険加入費用  
(全員必須、治療・救済費用無制限)

- ・奨学金： JASSO奨学金：70,000円（若干名）  
※ JASSOの支給要件を満たす者（日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、成績・所得の基準を満たす者等）のうち、若干名に限ります。

#### 【申込方法】

- ・申込み：次のHPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。 <アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasuu.cpiet.kyoto-u.ac.jp/>
- ・提出先：吉田本部構内 教育推進・学生支援部棟1階 国際教育交流課 海外留学掛 075-753-2488

【申込締切】2019年6月10日（月）12時00分（正午）

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子  
学際融合教育研究推進センター 西島 薫  
ryuga-east.asia\*mail2.adm.kyoto-u.ac.jp（「\*」を@に変更）

#### 【備考】

- ・本プログラムは以下の機関・事業により一人当たり計7万円の援助を受けて行われます。
  - (1) 京都大学アジア研究教育ユニットによる支援
  - (2) 京都大学重点アクションプランによる支援
- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2019年度前期：全3限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・海外旅行傷害保険については、指定の保険プランにご加入いただきます。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「タイ研修」（アジア研究）の単位に充当されます。
- ・本プログラムは、「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成」から京都大学アジア研究教育ユニット、京都大学重点戦略アクションプランによって引き継がれた支援体制のもとでおこなわれます。

### 3.3 研修日程

チュラーロンコーン大学サマースクール โครงการอบรมหลักสูตร Chulalongkorn Univ. Summer School 2019			
月日 (曜)	時間	プログラム概要 (場所/教室)	担当者
วันที่ เดือน (วัน)	เวลา	กำหนดการ (สถานที่ ห้องเรียน)	ผู้รับผิดชอบ
9月1日 (日)	TG623	เดินทางถึงประเทศไทย 到着 TG623 (スワンナプーム国際空港)	パラナン先生
	18.00	宿泊料支払い・チェックイン (CU iHouse) ชำระเงินค่าที่พัก/เช็คอิน	
9月2日 (月)	9:00	チュラーロンコーン大学キャンパス案内 (601/7 MCS) แนะนำและนำชมมหาวิทยาลัย	パラナン先生
	12:00-13:00	昼食	
	13.00 - 16.00	タイ国紹介・タイ文化入門 (601/3 MCS) ความรู้พื้นฐานเกี่ยวกับประเทศไทย	チョムナード先生
9月3日 (火)	09.00 - 12.00	タイ語講座 1 (601/7 MCS) เรียนภาษาไทย 1	クワンチャノック先生
	12:00-13:00	昼食	
	13.00 - 16.00	タイ語講座 2 (601/11 MCS) เรียนภาษาไทย 2	クワンチャノック先生
9月4日 (水)	09.30 - 12.30	THAI LITERATURE AND CULTURE (授業参加) (402 BRK)	ナンブン先生
	12:00-13:00	昼食	
	13:00-16:00	タイの歴史 ประวัติศาสตร์ไทย (503 BRK )	ティラワット先生
9月5日 (木)	09.30 - 12.30	実地見学：エメラルド寺院 ทัศนศึกษา วัดพระแก้ว	カモンティップ先生
	12.00 - 13.00	昼食 รับประทานอาหารกลางวัน	クワンチャノック先生
	13.00 - 16.00	自由行動 พักผ่อนตามอัชฌาศัย	
9月6日 (金)	09.30 - 12.30	タイ語講座 3 เรียนภาษาไทย3 (601/11 MCS)	クワンチャノック先生
	12.00 - 13.00	昼食 รับประทานอาหารกลางวัน	
	13.00 - 16.00	タイ語講座 4 เรียนภาษาไทย 4 (601/11 MCS)	クワンチャノック先生
9月7日 (土)	終日 ตลอดวัน	実地見学：古都アユタヤ/伝統産業 ทัศนศึกษา อุทยานประวัติศาสตร์อยุธยา	ダナイ先生
9月8日 (日)	終日 ตลอดวัน	自由行動 พักผ่อนตามอัชฌาศัย	
9月9日 (月)	09.30 - 12.30	JAPANESE BUSINESS CONVERSATION (授業参加) ( 511 BRK)	ユッパワン先生
	12.00 - 13.00	昼食 รับประทานอาหารกลางวัน	
	13.00 - 16.00	自由行動 พักผ่อนตามอัชฌาศัย	チャーณวิตต์先生
9月10日 (火)	09.00 - 12.00	タイの歴史と文化講座 สังคมและวัฒนธรรมไทย (601/9 MCS)	チャーณวิตต์先生
	13.00 - 16.00	昼食 รับประทานอาหารกลางวัน	



		タイ語講座 5 เรียนภาษาไทย 5 (601/11 MCS)	
9月11日 (水)	09.30 - 12.30	タイ語講座 6 เรียนภาษาไทย 6 (401/16 MCS)	クワンチャノック先生
	12.00 -13.00	昼食 รับประทานอาหารกลางวัน	
	13.00-16.00	自由行動 พักผ่อนตามอัธยาศัย	
9月12日 (木)	09.30 - 12.30	INTRODUCTION TO JAPANESE CULTURE (授業参加) (301 BRK) 2223281 ปริกศัณวดี นธรรมญี่ปุ่น	チョムナード先生
	12.00-13.00	昼食 รับประทานอาหารกลางวัน	
	13.00 - 16.00	タイ語講座 7 เรียนภาษาไทย 7 (601/11 MCS)	クワンチャノック先生
9月13日 (金)	9.00-11.00	修了式 พิธีรับมอบประกาศนียบัตร (814MCS )	
9月14日 (土)	TG672	帰国 เดินทางกลับ	

BRK อาคารบรมราชกุมารี : โบโรมลาร์ชาควมารี・บิล, MCS อาคารมหาจักรีสิรินธร : มาห์ชาควลีรีสินตัน・บิล

### 3.4 参加学生一覧

班 長	氏 名	NAME	所 属	学 年
	伊藤 駿介	ITO SHUNSUKE	工学部	B2
	大橋 明日香	OHASHI ASUKA	文学部	B1
	嶋田 佳奈	KAMODA KANA	農学部	B2
	清池 祥野	KIYOIKE YOSHINO	文学部	B2
	黒田 航	KURODA WATARU	法学部	B2
	千種 杏奈	CHIKUSA ANNA	文学部	B4
	富上 恵理	TOKAMI ERI	法学部	B4
○	藤澤 奈穂	FUJISAWA NAHO	文学部	B2
	増田 祐	MASUDA YU	経済学部	B2
◎	水野 貴文	MIZUNO TAKAFUMI	文学部	B2

### 3.5 タイ語会話教室

ジェッサダコーン・ガラポン [ジア]

アジア・アフリカ地域研究研究科

2019年8月22日から29日まで、タイのチュラーロンコーン大学の授業に参加する日本人学生のためのタイ語講義を10コマ行った。10人の学生が2週間でタイの首都であるバンコクにおいて学校に通いながら、日常生活に困らないのとタイ文化を楽しめることを目的として、簡単なタイ語が分かることを講義の目標にする。その目的に応じて、初級会話と聴解の能力を優先にし、授業を行った。

授業においては、「タイ語レッスン初級1」という教科書を用いた。タイで日本人がよく出会う場面における会話、その会話の関連語彙と文法解説などがこの教科書の特徴である。さらに、教科書には、IPA表記（International Phonetic Alphabet）をタイ文字に合わせて掲載しているので、入門の学習者にとって発音を練習しやすい。授業の最初の2コマは、タイ語の音韻の講義と練習であった。タイ語には、日本語にない母音や子音が多く、さらに5つの声調もあるため、会話や文法の講義に入る前に発音の基礎に慣れる必要がある。教科書のIPA表記を用いながら、タイ語が母語である私から、母語、子音と声調のそれぞれの発音を聞いてもらい、実際に発音の練習をさせる。後の8コマは、教科書の第1～8課に沿って行った。コマごとにその課に出てくる文法の意味と使い方の説明した後、学生にそれぞれの文法と関連語彙を用いて文章を作らせる。この手段によって、学生にはその文法を正しく理解できるかどうか分かる。よく理解できていない場合は、もう一度説明する必要がある。文法を習った後、学生にその文法を使う会話を読んでもらい、内容を理解させる。全ての授業はIPA表記を通して学生に練習させるが、最後の授業の15分を生かしてタイ文字に触れさせる。初日から配ったIPAが掲載されているタイ文字の練習帳を参考しながら、皆の名前をタイ文字で書かせる。10コマ5日間の講義はほんの短時間であるものの、学生の皆の成長を見ることができ、感動した。多くの学生は初めてタイ語を習うにもかかわらず、タイ語の発音も文法もよく理解できた。授業中に皆が努力して活発に習ったことを生かす上、自ら質問をすることもできる。今回の講義を通して、少しでも彼らがタイで様々な経験を得るのに役立てれば、タイ人である私にとっては嬉しいことである。

### 3.6 共同発表

日時：2019年9月12日（木）9:30～12:30、 場所：BRK 301 教室

担当教員：チョムナード・シティサン（チュラーロンコーン大学文学部・助教授）

#### 1. 「祭り：ローイクラトン・灯籠流し」

水野貴文

京都大学文学部2年

藤澤奈穂

京都大学文学部2年

ナッチャノン・ブンサリンカーラノン

チュラーロンコーン大学文学部

イッティゴーン・ブンムーアン

チュラーロンコーン大学文学部

ダノップ・リーヌグーン

チュラーロンコーン大学文学部

パッチャラ・ラームシリ

チュラーロンコーン大学文学部

パッチャラポン・アマータヤグン

チュラーロンコーン大学文学部

シリンド・ウンナーピラック

チュラーロンコーン大学文学部

ピチャ・ラムサム

チュラーロンコーン大学文学部

#### 2. 「なまはげ祭りとピーターコン祭り」

千種杏奈

京都大学文学部4年

伊藤駿介

京都大学工学部2年

ピティコーン・ジューワッタナサムラン

チュラーロンコーン大学文学部

サーウィトリー・アヌグーンシリポン

チュラーロンコーン大学文学部

アピシャヤ・シャカードタム

チュラーロンコーン大学文学部

アラヤー・ポンラオハパン

チュラーロンコーン大学文学部

毛利勇樹

チュラーロンコーン大学文学部

アツカラチャイ・スツタルアン

チュラーロンコーン大学文学部

パツワディー・リーポントウック

チュラーロンコーン大学文学部

#### 3. 「イーペン祭りと紙風船上げ祭り」

清池祥野

京都大学文学部4年

増田祐

京都大学院文学研究科1年

パワラン・ウィラウッチポン

チュラーロンコーン大学文学部

ピムラウィー・シリサップ

チュラーロンコーン大学文学部

ワンニダー・ヨンチャイユット

チュラーロンコーン大学文学部

シラダー・デチャンチャイユ

チュラーロンコーン大学文学部

スイリモン・サッパソー

チュラーロンコーン大学文学部

サスイラモン・ヨンプリシャレート

チュラーロンコーン大学文学部

タックサポン・ニンナカラ

チュラーロンコーン大学文学部

相馬優香

チュラーロンコーン大学文学部

#### 4. 「ヘイティンパンサー祭りと蠟燭祭り」

黒田航

京都大学法学部2年

大橋明日香

京都大学文学部1年

パウイット・タツマウィッタワット

チュラーロンコーン大学文学部

ワリッサラー・チャンゲーウ  
パンパウイー・ナークデー  
カビサラ・サスイサッジャ  
ニルモン・チャーンチャックディー

チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部

5. 「ブンバンファイと脚折雨乞」

伊藤駿介  
鴨田佳奈  
ティップナパー・リムサーノン  
オンニチャー・ステーラトリッサナー  
ニチャパー・トンディー  
タンチャノック・ブアサーイ  
パーリチャー・ラオハモントンゲン  
チャニッサラー・チャイヤニン  
アンナー・スックチャルーン

京都大学工学部 2年  
京都大学文学部 2年  
チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部  
チューラーロンコーン大学文学部

### 3.7 担当教員所感

#### 「サマースクール 2019」について

チョムナード・シテイサン

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座・准教授

チュラーロンコーン大学文学部で毎年開催される「サマースクール」は、今年も9月に実施されました。今回も暑い中、京都大学の学生のみなさんはよくがんばって研修に励んでくれました。また、タイのサマースクールに先立って行われた京都での研修に参加したチュラーロンコーン大学の学生たちが、京都大学の学生のみなさんのために自ら進んで案内役を引き受けてくれたことも頼もしく、これも短期交流プログラムによる人的つながりの成果だと認識しています。



一方、恒例の日本語専攻学生との合同発表ですが、今回は日本とタイの似たような祭りを取り上げてもらい、その類似点と相違点について論じてもらいました。このテーマのもと、学生たちは、「イーペン祭り（北タイの灯籠流し）」と「紙風船上げ祭り」や、雨乞い儀礼としての「ブンバンファイ（ロケット祭り）」と「脚折雨乞」、「ピー・ターコーン」と「ナマハゲ」など、日本とタイの興味深い祭りの比較研究をしてくれました。各グループがこの発表を通して何かを発見してくれたら、担当者として大変嬉しく思います。

現代社会においては、自国と他国の関係はますます密接になり、文化もまた国境を越えて接触と融合を繰り返しているといえます。サマースクールでの交流を通してそのようなことを体験し、「世界」という社会の中で学生たちが自分たちの位置づけができれば、21世紀における真のグローバル人材になり得るのではないかと思います。

## เกี่ยวกับ “ซัมเมอร์สคูล 2019”

รองศาสตราจารย์ ดร.ชมนาด ศีตีสาร

สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น ภาควิชาภาษาตะวันออก คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย

โรงเรียนฤดูร้อนหรือ “ซัมเมอร์สคูล” ที่จัดเป็นประจำทุกปีที่คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย ในปีนี้ก็จัดขึ้นในกันยายนเช่นเคย ในครั้งนี้ นักศึกษาจากมหาวิทยาลัยเกียวโตก็ได้ตั้งใจฝึกอบรมเป็นอย่างดีท่ามกลางอากาศที่ร้อนระอุ นอกจากนี้ การที่นิสิตของจุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัยได้เข้าร่วมโครงการอบรมที่เกียวโตซึ่งได้จัดขึ้นก่อนหน้าโรงเรียนฤดูร้อนในประเภทสโตนีย์ ได้อาสาทำหน้าที่คอยแนะนำและดูแลนักศึกษาจากมหาวิทยาลัยเกียวโตก็สามารถช่วยแบ่งเบาภาระไปได้มาก ซึ่งข้าพเจ้าภูมิใจว่า เป็นการแสดงให้เห็นถึงผลของความสัมพันธ์ระหว่างบุคคลอันเกิดจากโครงการแลกเปลี่ยนระยะสั้นด้วย

ในส่วนของกิจกรรมการนำเสนอผลงานร่วมกับนิสิตเอกภาษาญี่ปุ่นที่เป็นประจำนั้น ในครั้งนี้ข้าพเจ้าได้ขอให้ทุกคนหยิบยกงานเทศกาลของญี่ปุ่นและไทยที่คล้ายคลึงกันขึ้นมาเพื่ออภิปรายเกี่ยวกับจุดเหมือนและจุดต่าง ผู้เรียนต่างก็ได้ศึกษาเปรียบเทียบงานเทศกาลที่น่าสนใจของไทยและญี่ปุ่นมา เช่น การเปรียบเทียบระหว่าง “เทศกาลยี่เป็ง (งานลอยกระทงของชาวไทยภาคเหนือ)” กับ “เทศกาลลอยลูกโป่งกระดาษ” หรือการเปรียบเทียบระหว่าง “ประเพณีบุญบั้งไฟ” กับ “พิธีขอฝนซุเนะโอะริ” ซึ่งต่างก็เป็นพิธีขอฝนทั้งคู่ ทั้งยังมีการเปรียบเทียบกับระหว่าง “ผีตาโขน” กับ “นะมะฮะเงะ” ด้วย ข้าพเจ้าจะดีใจมากถ้าแต่ละกลุ่มสามารถค้นพบบางอย่างได้ผ่านการนำเสนอในครั้งนี้

ในสังคมปัจจุบัน ประเทศของตัวเองและประเทศอื่นมีความสัมพันธ์กันแน่นแฟ้นขึ้นเรื่อยๆ กล่าวได้ว่า วัฒนธรรมก็เป็นสิ่งที่เชื่อมต่อและหลอมรวมกันข้ามเส้นแบ่งเขตแดนประเทศอยู่ตลอดเวลา หากนิสิตและนักศึกษาได้มีประสบการณ์ดังกล่าวผ่านการแลกเปลี่ยนในโรงเรียนฤดูร้อนและสามารถประเมินฐานะของตนในสังคม “โลก” แล้ว ข้าพเจ้าคิดว่า พวกเขาจะได้กลายเป็นทรัพยากรบุคคลระดับสากลที่แท้จริงในศตวรรษที่ 21

### 3.8 参加学生報告

#### タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書

工学部 2年

伊藤駿介

私がタイで学んだことはとても多くあるが、その中で印象に残ったものを3つに絞って報告する。

まず一つ目は、タイの料理について知ることが出来たということだ。我々はプログラム中にソムタムとラープムーを作った。ソムタムでは、唐辛子やライム、ニンニクをすり鉢のようなものを使ってつぶしながら混ぜ合わせて香りを起こした後に、メインの食材であるパパイヤやニンジン、インゲン豆を加えて混ぜ合わせた。それだけである。どのようにハーブや香辛料の香りを出しているのか気になっていたが、すり鉢で潰すだけの簡単な作業で、全体的に思っていた以上に作り方がやさしく、忙しいときでも、料理が得意でなくてもつくることができる。使った教室の都合上、火の取り扱いはできないため、スープや炒め物はできなかったが、料理を教えてくださいと先生にハーブや香辛料などを聞き、持ち込める物は日本にもってきているため、日本に帰ってからでもチャレンジしてみたい。

二つ目は、言語に関することである。事前にプログラム前の事前授業を受けていたため、現地でのタイ語の授業はタイ語の理解度をさらに深めることが出来る有意義なものだった。やはり、現地に行ってその言語を学ぶことは京都大学で一方的な講義を受けながら文法を学び続けるよりも圧倒的に早く身につけることが出来ると思う。バンコクの人はおよその人が英語を話すことが出来るが、独特な発音などがあり少し聞き取りづらい部分もある。タイ語を勉強することは現地で生活するには非常に便利な道具になり得る。そのため、大きなモチベーションとなり、さらに言語や文化の理解を深めるよい機会となった。

三つ目は、バンコクの光と闇の部分を見ることができたということである。バンコクは Siam Center や Icon Siam などの高層ビルで中に名だたるブランド品やタピオカ店がひしめき合う高級なものから、スラム街で物乞いをしたり、ドブネズミとともに屋台をひらいたりというものまで非常に幅広かった。観光だけでは光の部分しかみることができないと思うが、今回の2週間のプログラムで多くのことが見えた。例えば、屋台では水道が通っていないため大きなバケツのようなものに水と洗剤を入れたものと水だけを入れたものを用意し、まずは洗剤で洗い、次にバケツの水ですすぎをして終了だった。流水ではないため、どんどんと水が汚くなっていくのにそんなことは気にせずに皿を洗い続けるという光景を見てしまった。飲食店の衛生管理がこんなものでもよく感染症などの病気が蔓延しないなと思って少し感心する部分もある(実際にはあるかもしれない)が、やはり少し考えなければいけない問題だと思う。

このように、タイでは同年代のチュラ大の学生や先生に支えられながら非常に多くのことを学ぶことが出来た。私はこのプログラムでは珍しい工学部であるが、工学部としてタイに貢献していけることは何だろうか、タイ人の文化の面も踏まえながらこれからも深く考えていきたい。

## タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書

文学部1年

大橋明日香

タイ研修で一番感じたのは話を聞けることがいかに価値のあることであるかということである。研修中の2週間は、学生からタイのことやチュラーロンコーン大学のことを教えてもらったり、先生のガイド付きで有名だったり文化的価値があったりする場所を見て回ったりした。以前旅行でタイに行ったことはあったが、ただ観光地を見て回るのと実際にタイ人（学生も先生も）の話を聞いたり彼らにいろいろなことを教えてもらったりしながら生活するのは学べるのが全然違った。情報量が違うのは当然だが、質もとても高かったのだと思う。百聞は一見に如かずと言うように、もちろん目で見ることも大切ではある。しかし（噂話やネットの情報ではなく）地元の人々の声を聞けることも見ることと同じかそれ以上に重要なことだと感じた。

大学ではタイ語の勉強もしたが、授業に参加したり実際に寺院などに行ったりしてタイの文化や歴史も学んだ。また、タイ人学生と一緒に「日本とタイの祭りの比較」というテーマのプレゼン発表もグループワークで行った。考えたこともない話なので日本人にとっても決して簡単でないテーマだったのに、それを日本人もタイ人も日本語で発表する必要があったから、チュラの学生にとっては非常にハードだったのではないかと思う。それでもみんなとてもしっかりした発表をしていたのが印象的だった。発表準備のときに協力できることはしたと思っているが、ハードな発表準備の中でも私たちに気を使ってくれていた彼らに対して、ありがたいような申し訳ないような自分の無能さを痛感するような、そんな気持ちになった。

チュラの日本語を専攻している学生たちは本当に日本語が上手で、日々一生懸命勉強しているであろうことが感じられた。日本語そのものだけでなく、日本のカルチャーや日本語の周辺知識にも詳しくて、日本人の自分ですらまいち分からないことまで知っているとき分かったときには心底驚いた。自分も彼らのようにしっかり勉強しないといけないと気づかされた。また、チュラの学生はみんな本当に優しくて仲良くしてくれて、とても嬉しかったと同時にありがたかった。人との交流において優しさや思いやりが大事なことは世界共通のことなのだと改めて感じた。彼らの中にはすでに京大に来たことがある人も何人もいたが、彼ら



や彼らの後輩が次に京大に来たときには、私も彼らと同じくらい、いや彼ら以上のおもてなしをしたいと強く思った。

研修中には無知を自覚して恥ずかしいような気持ちになったこともあった。「タイでは〇〇だよ、日本は？」と聞かれて「えっわからない…」と言うしかなかったことが1回ではなく2~3回あったのだ。相手側のことを知るのも重要だけど、自分側のことを知っていてそれを教えることができるということも同じくらい重要だと気づかされた。国際交流の機会は今後もあるはずだから、そのときまでにはもっと日本のことを知っておこうと思った。

私が感じたタイ人の特徴は、彼らは良い意味で適当だということである。ちょっとした失敗をしても「大丈夫！」と言われ、約束の時間に遅れて「ごめんなさい！」と謝っても「大丈夫！」と言われ、私たちのタイ語が下手でも先生が「大丈夫！」と言う。タイ人は「大丈夫！」という意味の言葉を本当によく使う。ときには「絶対大丈夫じゃないって」と思うこともあったが、日本人が細かいことを気にしすぎな部分もあるのではないかと思わされた。ほどほどに適当に、そしてポジティブに生きていたいと思えるようになった。

バンコクの街で過ごして思ったのは、バンコクの都心部、特にその中心エリアのサイアムはものすごく栄えているということである。巨大なデパートが何軒も立ち並び、2週間では位置関係が覚えきれず何度か迷子になりかけた。デパートの中では日本より物価が安いはずなのに全く手が出そうにないものも見受けられた。よく行くわけではないのははっきりとは言えないが、もしかしたら東京よりも栄えているのではないかと思うほどである。その一方でチャイナタウンの裏道やバンコクの郊外などではスラムのような場所や貧しい人々を見かけることもあった。同じ街でもここまで違いがあるのかとショックを受けた。表と裏、光と影、言い方は色々あるかもしれないが、どちらか一方だけがバンコクなのではなく、2つの面を持ち合わせてこそそのバンコクなのだろう。日本でも格差社会をどうにかしようと言われているけれど、日本に限らず世界各地に格差社会問題はあるのだと感じた。

この研修での2週間は、日本で過ごす2週間とは比べ物にならないほど密度の濃い2週間だった。本当に多くのことを学ぶことができた。この研修のこと、この研修で出会った人々、この研修で学んだことは忘れられないものになるだろう。研修で出会った皆さんに心から感謝しています。本当にありがとうございました。

### タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書

農学部2年

鴨田佳奈

私は、タイに行って、日本では味わうことのできないとても刺激的な2週間を過ごした。日本で、いつも通りのなんの変化もない夏休みを過ごしていたかもしれないと思うと、本当

に参加してよかったと思う。タイでの大学生活と、普段の生活や街の様子の2つの点から、このサマースクールで得たことを振り返ろうと思う。

まずは、チュラ大での大学生活についてである。驚いたのは、タイの学生の姿である。タイの学生は、勉学に対してとても積極的であった。授業中に手を挙げて質問したり、真剣にメモを取ったり、発表したり、話し合ったりと、生徒主体の授業がとても印象的であった。テストに向けて単位を取るために勉強するというよりも、自分の興味のある分野を深く掘り下げるといふ、本来大学生があるべき姿を見ることができ、とても刺激された。また、日本語専攻の生徒の日本語能力にも驚かされた。現地での私たちとの会話は、ほとんど日本語であった。私も、英語を話せるようになることはもちろん、多言語話せるようになりたいと強く思った。

タイの学生は、このように勉学に積極的であるとともに、勉学だけでなく、クラブ活動や、普段の生活もとても楽しんでいるように感じた。休み時間の様子や、放課後、通学の様子を見て、楽しんで大学に通っていることが強く伝わった。楽しみつつ、勉強も積極的に行っており、本当に理想像だと思った。私も、今しかない大学生活を楽しみつつ成長したいと思った。また、私は、今現在自分が本気でやりたいことがまだ見つかっていない。どういう将来を送りたいかを含め、自分が深く学びたいことを早く決めて、しっかりと知識を身に着けたいと強く思った。

次に、大学生活以外のタイで過ごした日々で感じたことについてである。特に印象的なことは、キラキラした光の部分と、まだ発展途上であったり、忘れてはいけなかったりするような影の部分が、共存しているということである。チュラ大がある場所は、日本でいう渋谷のようなところであり、キラキラしたショッピングモールや高層ビルが並び、キラキラした若者が集まっていた。その一方路地裏や、少し離れた町では、路上で過ごしている人がいたり、堂々と売春が行われていたり、影の部分を目の当たりにした。また、タイのバーツ危機の際に建設が中止になった建物もそのまま残されており、過去の暗い出来事を物語っていた。地方から出てきた私は、普段の生活で、都会の楽しいキラキラした部分に憧れるばかりで、影の部分から目を背けがちだったということを実感した。特に何も徳を積むようなことをしているわけでもないのに、私は特に生活に困らない環境で過ごしている一方、何も悪いことをしてないのに、生活に困っている人がいるこの世界は、とても理不尽だと思った。こんな環境の中でダラダラと過ごしている毎日を思い出して申し訳ない気持ちになった。このような恵まれた環境で日々を過ごしていることに感謝して、精いっぱい生きなくてはならないと強く思った。

この2週間をタイで過ごすことが、私の考え方や、これからの過ごし方に大きな影響を与えてくれたと思う。タイの学生からは、積極性を教えてもらった。タイの町からは、現地できしか感じることでできない世界を感じた。様々な学部、学年から集まって一緒に行った学生からは、能動的に動くことの重要性、自分にはない考え方を得ることができた。普段の生活

ではかかわることのできないコミュニティの人たちと交流できたことは意味のあることだったと思う。さらに、普段自分が置かれているコミュニティから離れてみて、自分にとってそこがいかほど大切なところであるかも実感したので、これからより一層充実した日々を送りたい。この、タイでの2週間は私の考え方を大きく変えてくれた。この経験をしっかりと自分の生き方に生かしたいと思う。

### タイ・チュラーロンコーン大学サマープログラムに参加して

文学部2回生  
清池祥野

インドネシア大学スプリングスクールで初めて東南アジアに渡航して以来、今回のタイは私にとって2度目の東南アジアへの渡航でした。タイへ渡航する前は僕にとっての「東南アジア」はインドネシアであり、ほかの東南アジア諸国がそれぞれ異なる文化、雰囲気を持っていると頭ではわかっている、どうしてもインドネシアで見たものが「東南アジア」では普遍的なものだと思ってしまうのでした。だからこそ今回タイという統治形態、宗教、地理的条件、発展具合などインドネシアとは全く異なる東南アジアの国に訪問することで、僕の中で新たな東南アジアを見つけることができました。

僕がタイの中で特に新鮮だと感じたのは、宗教です。タイで主に信仰されているのは仏教ですが、日本の仏教とはまるで違うものでびっくりしました。大乘仏教と上座部仏教の違いがあるのは知っていましたが、日本の仏教が神道などと結びつき独自の発展を遂げているのに対して、タイの仏教は主にインドの思想に影響を受けており、同じ仏教とはいっても全く違う宗教のように感じました。また日本の仏教が現代の日本人の生活にあまり深く影響していないのに対し、タイの仏教は人々の生活の中に今も深く根ざし、公的な場所（王室など）にも影響があるというのは日本ではあまり考えられない事なのでカルチャーショックを受けました。

日常生活の中で特に驚いたのは食事の時です。日本では食事を食べる前には「いただきます」食べ終わると「ごちそうさま」と言うのがあたりまえですが、タイにはそのような風習はありませんでした。また食事を食べる時日本人は普通箸、食事によってはナイフとフォークを使いますが、タイでは右手にスプーン、左手にフォークを持って食べるのが普通でした。そして食事をみんなで分け合って食べる時日本では最後の一つを「遠慮の塊」として食べたがらない傾向がありますが、タイでは最後に残った一つを食べると美人な彼女、イケメンな彼氏ができると言われていてみんな必死に食べようとするそうです。食事一つとっても日本とタイ、もちろんインドネシアとも全く違う文化が根付いていてとても興味深かったです。

ほかにもタイで感じたこと、驚いたこと、不思議に思ったことたくさんありますがここには書き切れません。けれどこのタイに行った経験は私が今後ますますグローバル化が進んでいく世界で生きていく上で確実に生きるものだと思います。様々な文化を知ることで様々な背景を持つ人たちを理解する一助になると思うし、いろいろな国を知るほどもっと違う国について知りたいと思うようになりました。貴重な体験をすることができ、このプログラムに参加できてほんとうによかったです。

## チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書

法学部2年

黒田航

今回のチュラーロンコーン大学サマースクールに参加する前、私は事前講習の5日間ほどしかタイ語を学習したことがなかった。しかし、2週間の短期研修中で私のタイ語は幾分上達した。タイ語の授業は英語で行われて、タイ文字を使うことはなく、多くが初心者である私たちに合わせたレベルであった。授業の中だけでなく、タイの学生から単語を教えてもらったり、食堂で食べ物を注文したりするなかで、タイ語に慣れていくことができた。タイ文字はいたるところで見かけるものの、いくつかの容易な文字と自分の名前やニックネームに入っている文字しか使うことができない。タイ文字の習得は今後の大きな学習課題である。

私にとってタイを訪れるのは、今回が初めてであったが、訪れるときに不安はなく、ただわくわくした気持ちで満ち溢れていた。というのは、タイに頼れる友人がいるからである。京都サマープログラムで出会ったそのすばらしい友達と、タイで出会った新たな友達はいつも私たちのことを気にかけてくれた。彼ら彼女らとともに、ショッピングモールや観光地に行き、食事を楽しんだことは忘れることのできない思い出である。本当に感謝している。ところで、私がタイで驚いたことは沢山あるが、その中で特に驚いた二つのことを振り返ってみたい。1つは、街の様々なところに歴代の国王やその一家の方々の写真や肖像が飾られていたり、毎日2度決まった時間に国歌が流されたりすることである。ビルの側面に前国王の姿が大きく描かれているのには驚嘆した。タイの人々がいかに彼を敬愛しているかを物語っているようであった。また、国歌が流れ始めると、人々は立ち止まり、中には歌い出す人もいる。映画館では本編の開始前に国歌ではないが国王賛歌が必ず流されるのも興味深い。もう1つ私を驚かせたのは、都心部にある日本食レストランの多さである。ショッピングモールのレストラン街にあるお店の半数以上は日本料理店である。日本よりも日本レストランが多いのである。これは、日本人として、日本食が受け入れられていることをうれしく思うと同時に、異国にいる気がせず少しつまらなくも感じた。私たちはできるだけタイ料理店を選びながらも、数回だけ日本食も口にしました。味はメニューによって、日本と同じものから、タイ風にアレンジされているものまであったが、総じて美味しかったです。

このチュラーロンコーン大学のサマープログラムでは、タイ語の授業、実地研修、タイ料理クラス、そして共同発表が主な内容である。実地研修は2日間あり、1日はエメラルド寺院と王宮を訪れ、もう1日はアユタヤへ旅をした。また、アユタヤでは象に乗る体験もすることができた。タイ料理クラスでは、ソムタムなど易しい料理を作った。唐辛子を入れすぎると辛くて食べられない。共同発表では、どのグループもテーマは祭りと決められていた。各グループは、具体的にタイの祭りと日本の祭りを1つずつ選び、それらを比較する。

チュラーロンコーン大学での2週間はあっという間に過ぎってしまった。タイのことが好きになった私は必ず戻ってくることを決意した。やはり、物質的にも精神的にも生活しやすいという感想が率直に出てくる。私は半年ほど前、インドネシアに行ったところから、東南アジアに惹かれている。今回タイを訪れて、その気持ちは増した。私は、人生のいくらかの時間をタイで生活しようと思う。東南アジアの広い地域を視野に入れることのできる仕事をするのであれば面白いに違いない。そして、チュラーロンコーン大学や京大の友人との関係が将来に渡って継続し、また彼ら彼女らと再会することを願っている。

#### タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書

文学部4回生

千種杏奈

今回のプログラムへの参加のきっかけは、ASEAN 諸国についての理解を深めたいと思ったからである。来年の就職が決まっている私にとって、日本企業が数多く進出するタイに興味があった。また ASEAN の盟主であるタイは、どのような性格をもつ国なのだろうと、自分が実際に現地に行って知りたいと考えていた。

結果として、今回のタイのサマースクールは非常に刺激的で、今後さらに英語やタイ語を学び、より一層タイと日本の関係を深めたいと考えるようになった。私がタイで学んだことや感じたことについて、以下の三点にまとめて報告する。

一点目は、チュラーロンコーン大学の学生の皆さんの親切さと優秀さである。チュラ大の皆さんとは一緒に発表準備に取り組んだり、色々なところへ遊びに連れて行ってもらったりした。2週間でチュラ大の方々から受けた様々な「おもてなし」はとても濃く、感激した。彼らが今後来日する際には、自分がよりたくさんの「おもてなし」で恩返しをする番だと思っている。また自分は京大で4年間真面目に勉学に励んだつもりでいたが、チュラの日本語学科の皆さんはまだ2年生であるにも関わらず日本語がとても上手く、さらに第四、第五外国語まで習得している姿を見て、いかに自分の学びが足りなかったかを痛感した。残り少ない学生生活であるが、これから英語やタイ語などの外国語をもっと主体的に勉強をしてきたいと感じた。

二点目は、自分の宗教やアイデンティティの自覚である。世間で「日本人は無宗教」と言われるように私もそうだと思っていたが、タイの仏教に根差した生活や、チュラ大生と合同

の「タイと日本の祭りの比較」の発表を通して、自分の考え方がいかに神道や儒教的価値観に基づくものであるのかを実感した。また日本の仏教は大乘仏教だが、タイの仏教は上座部仏教であり、仏教でも思想や様式が日本と異なることに驚いた。またバンコクは街や人も日本と似ているところが多い印象であったが、街の至るところに王族の肖像があったり、お坊さんが修行されていたりと、タイの「日常の当たり前」を感じる事ができた。

三点目は、タイで私が取り戻した前向きな姿勢である。修了式の際にも話題になったが、日本の「大丈夫」と同義のタイ語の「マイペンライ」について言及したい。私は「大丈夫」はマイナスからの回復というイメージがあるが、タイ語でこれと同義の「マイペンライ」にはプラスへの転換というイメージを持っている。日本は超高齢社会に突入し、将来への不安や景気失速などで先行き不透明の暗いニュースが多い中、自分自身も前向きな姿勢や挑戦を忘れてしまっていた気がした。「マイペンライ」を大切にして、色々な学びや希望を、自分が行動することで見つけていきたいと感じた。

以上が私がタイで感じ、学んだことである。自分自身の気づきや学びも大きかったが、今回の一番の爽りは、たくさんのタイ人の友達ができたことである。今後もタイ人の友達との繋がりを大切にして、きっとまたタイや日本で会いたいと思っている。

最後になりましたが、今回のプログラムを支えてくださったチュラ大の先生方、学生やサポーターの皆さま、京大の先生方、職員の皆さまには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

### チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書

法学部4年生

富上恵里

チュラーロンコーン大学での2週間のサマースクールでは、タイ語の授業やタイの歴史や社会についての講義、日本語学科の学生との共同発表、アユタヤや寺院・王宮の見学があった。共同発表ではタイと日本の祭りを調べ、両国の精神性や歴史を比較した。私たちの班はタイのヘーティアンパンサーと日本の高野山のろうそく祭りを比較した。プログラムを通じて私が印象に残っているのは2つある。

一つ目は、調べ始めた当初に「高野山のろうそく祭りに使われるろうそくの原料は何？」というタイの学生の質問に対する私の思いである。「ろうそくの原料はろうに決まっているし、祭りに何のろうそくを使うかなんて関係ないでしょ。」と、質問の意味も何も分かっていないのに固定概念で決めつけた自分の凝り固まった考え方である。後々話をよく聞いてみるとタイの祭りはろうそくで作った山車の華やかさを競うもので原料が大事になってくるらしい。この背景でなされた「ろうそくの原料は何」という質問は確かにタイの人にとってはとても重要な質問である。固定観念で決めつけた自分の過ちに気づかされると同時に、どのような

人との対話でも同じだが質問の意図を正しく読み取ること、相手の背景が自分の常識とは全く異なっていることを痛感した。

二つ目は、タイのチュラーロンコーン大学での和歌山県の認知度である。地元から京都に来て四年間京都で過ごし、私にとって和歌山の魅力はいや増したが残念ながら日本の中で和歌山の認知度は大きくない。しかし、タイでは違った。タイで出身県を聞かれ和歌山なんてどうせ知られていないだろうし大阪って答えようかなとも思いつつも「和歌山出身」と答えると「猫、たま駅長！行ったことある！」と予想外の反応をくれた。私が中学生のころ友達と猫を見に貴志川線に乗るとそこには、「路線継続のために和歌山県民は一年に五回乗って貴志川線を存続させよう」と少し悲しいポスターが貼られてあった、駅である。現在日本では地域創生が掲げられ観光誘致や地域の魅力再発見が行われている。テレビでも「意外なところが外国人に大人気」と題うち、見知らぬ観光地が紹介されていることがある。しかし、私はこのプログラムを通しタイの人の考え方に触れることで、観光地が人気になるのは意外ではなく何か理由があると感じた。日本らしさを求められる場合は確かに日本人や地元が誇りに思うことや精神を示し迎えばよいと思う。しかし、観光客を誘致しようとする際に自らが伝えたいことの他に相手は何を求めているかを深く知る必要があり、この観点を観光にも組み入れられればもっと誘致できるのではないだろうか。そのためにはよりそれぞれの国の観光客の価値観や歴史を知り触れる必要があると思う。それは旅行するだけでは得られない、もっと深い部分で感じる必要があると考えた。タイで2週間過ごし、一端を垣間見ることができたが、まだまだ私が学び考えることは沢山あると感じている。この視点こそが観光客を呼び込む上で必要になってくるのではないかとおもう。そして、ある国の人柄や文化を知ること、その視点をもって日本を見てみると新たな日本や地域の魅力を再発見することにつながるのではないだろうか。

タイはよく、微笑みの国や日本と同じ仏教の国であると言われ日本からの観光客にもものすごく人気の国である。でもこのプログラムを通して私は違う思いを抱くようになった。微笑みに込められた思いは日本の微笑みよりももっと深いものである場合もあるし、同じ仏教国だからといっても全く日本とは異なる。タイの人と話したりするととても気持ちが穏やかになるし街には刺激があふれている。留学中に話題になった「ウルトラマンブッダ」のように日本人にとってはあまり問題にならなくてもタイの人からすると大問題になる。日本とタイは似ているかもしれないが実はものすごく異なっている。でも「hiduhs」があふれる国、タイは私にとってものすごく好きな国となった。旅行ではなく現地の学生とともに生活を行いタイの深さを垣間見ることができた。タイの政治体制や国家の在り方に凶らずも直に触れる機会もあり、自分にとってとても貴重な体験となりました。これからもタイについて文化の相違点をもっと勉強したい、もっとタイの人やタイを知りたいと思うようになりました。現地で私たちをサポートしてくれたタイの学生や先生、多くの人にあえてよかったです。

## 2019年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書

文学部2年

藤澤奈穂

今回このプログラムに応募したのはタイという国に対する興味からである。私は文学部の授業の一環でタイ語を少し勉強していた。実際に現地へ行ってタイ語を使ってみたいし、もっとタイ語がつかえるようになりたい。そんな思いからこのプログラムに応募してみようと思った。またこのプログラムではタイの文化に触れることができるだけでなく、実際にタイの学生さんと交流することができるのも魅力的だなと感じた。

タイ語の授業は英語で行われ、日常会話を中心として1日に3時間ほどの授業があった。2週間タイ語を勉強し、タイ語とタイ文字であふれる中で生活したことで聞き取れるタイ語も増え、自分の中でタイ語がめきめきと上達する実感を感じた。これからももっとタイ語の勉強を続けたいと考えている。

タイのチュラーロンコーン大学へ実際に行ってタイ人の学生と交流してみてタイ人の学生の優秀さにとても驚かされた。わたしたち京大生は英語を喋れるといってもそこまで流ちょうに話すことはできない。しかしタイ人の学生たちは英語に加え日本語もとても堪能だった。また語学だけにとどまらず一緒にプレゼンをする活動もあったが、その中でもタイ人の学生たちの発想力の豊かさやまとめ方のすばらしさやその積極性に驚かされた。実際にタイ人の学生と交流をしたことで多くの刺激をうけ自分ももっと勉強をしなければいけないなという気持ちにさせられた。

また、タイ人のあたたかさ、明るさもとても印象に残っている。今回のプログラムでタイ人の学生さんには大変お世話になった。空港まで迎えに来てくれ、いろいろなところを案内してくれたり、一緒に食事を取ったりした。タイ人の方々はとても私たち日本人にとっても親切だった。また「マイペンライ」というタイ独特の文化、細かいことにとらわれず気楽にいこうという考えは日本にはない、足りないところで、神経質に悩むのではなく少し視野を広げてみることの大切さを感じた。実際にタイへ2週間行ってみてタイの文化を学ぶことができただけでなく、学生間での交流も深めることができ多くの刺激をうけることができた。

このプログラムの中で私は充実した2週間を送ることができた。その中でやはり実際に現地の国を訪れることの大切さを実感した。時代の流れの変化は激しく、メディアの影響力は大きい。例えば今は日本とタイの関係は良好であるが将来、いつその関係がくずれるかわからない。そのような中でメディアなどから得た情報だけでなく自分の目で見て感じた経験はとても大切だ。こういった派遣研修は両国の関係維持という面から見てもとても有用であると思う。



## 2019年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書

経済学部4年

増田祐

私がこのプログラムの参加を志望したそもその理由は、グローバル社会が加速する現代において自文化のみしか知らずに生きていくのはナンセンスであり、今のままでは社会人として活躍出来ないと考えていたからだ。よって文献やネットによる学習だけではなく、実際に現地に赴き、その土地の文化・国民の価値観に触れてくる「生の体験」が必須であると考えた。

そしていざ実際にこのプログラムに参加してみると驚きの連続であった。まず第一に驚いたのはタイの発展度合いである。チュラーロンコーン大学の近くにはデパートがいくつも立ち並び、どのデパートの内装・外装も華やかで清掃が行き届いており、日本のデパートをこえているのではないかと思うほどであった。

そして次に驚いたのは、その華やかさとは一転、一步街から踏み出すとまだまだ貧困を感じられる街並みやインフラが整っていない環境が存在するということだ。道に物乞いの人がいったり、上下水道や道路の整備が十分に行き届いていなかったりと、このあたりはまだまだ発展途上国らしさを感じ、格差を感じる部分でもあった。

さらに驚かされたのはチュラーロンコーン大学の施設としての充実さである。まず単純に驚くほど広い。バンコクの街の中央部にありながら約2.1平方kmの面積がある。また、最新式の器具が揃った広いトレーニングルームがあったり、なんと大学の中でマーケットが開かれていたり大学というより1つの街であった。単純に優劣をつけることは出来ないがあらゆる点で日本の大学とは大きく異なっていた。

そして最も驚かされたのはタイ人らの温かさである。一緒にプログラムを共にした現地の学生たちは、彼らの授業が終わった後や休日でも我々が観光に行きたいところをつきつきりで案内してくれたり調べたりしてくれた。そのことに深い感謝の念でいっぱい、もし彼等が日本に訪れる機会があったら、その時は精一杯歓迎しようと心に決めた。プログラムの修了式でその旨を述べると、チョムナード先生はこう答えた。「彼等は別に見返りを求めてやっている訳では無い。京都大学のプログラムに参加した際もあなた達は見返りを求めず無償で彼等に優しくしてくれましたよね？それと同じです。そうして今度は私達が恩返ししよう。その次はあなた達が恩返ししようと思うようになり、相乗効果的に友好的関係が築けるのです。」と。私は国際関係の本質的に重要な要素がこの言葉に詰まっているのではないかと感じた。損得勘定抜きに困っている人がいたら助けよう、優しくしようという精神が根本的に重要なのだ。これはなにも国際関係に限らず普段の人間関係に関しても同じである。

今まで海外経験は何度かあったがいつも友人や家族と共に行動し、現地の人々と積極的に文化交流する機会というのはほとんどなかった。そういう意味で、このプログラムは本当にこの上なく充実していた。エメラルド寺院や古都アユタヤを実地見学しに行き、その荘厳さに胸を打たれ、タイ料理を実際に作って食し、タイ語を拙いながらもある程度話せるようになった。どの授業も教師の方が非常に親身にそして面白く授業してくださったので退屈など全くせず積極的に楽しんで学ぶことが出来た。また、現地の学生との共同発表の際はまず彼らの日本人と遜色ない巧み日本語に非常に驚いた。率直に言って京都大学の学生が用いる英語のレベルとは一線を画していた(日本語専攻ということもあるが)。そんな彼らと取り組んだ共同発表は彼らの積極的な協力と好奇心も相まってスムーズに進めることができ、充実した発表が出来た。概してこのプログラムで得た最も大きなものはタイの文化を知ること(異文化理解)によって日本の文化を相対的に理解を深めること(自文化理解)が出来たことだ。この貴重な経験を自身の血肉に変え、社会に貢献出来る国際人間として今後活躍していきたい。私は既に就職先が決まっておき、今から進路が変わるということはないが、それでも今後働く上で今回の経験は必ず社会人として活かせると確信している。

#### 2019年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書

文学部2年

水野貴文

今回のサマースクールを通して私が学んだことは、「自分の外側について」と「自分の内側について」の2種類に大別できる。まず前者についてだが、これを説明する上でチュラーロンコーン大学生(以下、チュラ大生)との交流について言及せずにはいられない。彼/彼女らは滞在期間中のほとんど毎日、授業が終われば我々京都大学生を大学周辺のあちこちの遊びやご飯に連れて行ってくれた。チュラ大生の日本語力は驚くほど高く、日本語での会話を通してすぐに打ち解け合うことができた。しょうもない話から真面目な話まで色々なことを話して、多くの時間を共有することで、わずか2週間という短い期間ではあったものの、互いについてよく知り合い、強い関係を築くことができたと思っている。今後、タイに関する何かしらの報道を目にすれば、彼/彼女らのことを思わずにはいられないだろう。こういったある種の「つながりの感覚」は、何もタイに限定された話ではない。これまでは国外のニュース(政治、紛争、事件など)が報じられても、自分とは切り離された世界で起きている、どこかリアリティの欠けた出来事のような感があった。そこには人がいて、生活しているというごく当たり前のことに対する想像力が欠けていたのだろうと思う。チュラ大生との交流というひとつの経験を通して、自分自身の延長線上に海外があるような感覚を得られたことは、私自身の意識の大きな変化であり、財産となった。

続いて後者について説明する。私にとって、2週間海外の同じ場所に滞在し続けるという経験は初めてであり、徐々に現地に順応していった一方、生活スタイルの違いや言語の壁は

最終日まで常に突き付けられた。またチュラ大生との交流の中で、普段考えたこともなかった私自身の日本人らしさや日本語の使い方などに気づかされた。つまり、タイの文化・生活・言葉などに触れたときは、その裏返しで、私が日本のそれらに強く根差した存在であるということを実感することが多かった。日本においては、比較対象がないためなかなか気づきにくいことだと思うが、自身を内観するよい機会となった。

平日は基本的に午前・午後の2コマの授業がある。授業内容はタイ語、タイの文学や歴史、チュラ大生との共同発表、実地研修などがある。授業後はチュラーロンコーン大学周辺でご飯を食べたり、観光したりしてチュラ大生と交流を深める。休日は自由行動である。私にとって特に印象深いのは、チュラ大生との共同発表である。

私の班は、日本の灯籠流しとタイのローイクラトン祭りを比較したが、単に表面的な共通点や相違点を挙げるだけではなく、それらの共通点や相違点はどのようにして生じるのかについてまで深く考察することが求められ、なかなか難しい課題であった。しかし、そのような課題を考える中で文化比較のおもしろさを学ぶことができた。

今回のサマースクールが、私の進路に直接の影響を与えたということはない。しかしながら、英語で行われる授業において自分自身の英語力(特に聴く・話す)の低さを痛感し、またチュラ大生との会話において彼/彼女らの日本語、英語の語学力の高さを目の当たりにしたことで、専門分野の勉強と並行して語学力を身につけなければならないと思うようになった。また、より長期の留学や海外インターンシップなどを今後の選択肢として検討するようになった。最後に、今回のサマープログラムに関わった全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 4 ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

### 4.1 実施体制

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学

(University of Languages and International Studies [ULIS],  
Vietnam National University, Hanoi [VNU])

実施責任者

Đào Thị Nga My	日本語文化学部・学部長
Phạm Thị Thu Hà	日本語文化学部日本語部門長
Lê Thị Minh Nguyệt	日本語文化学部日本語部門・専任講師

ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学

(University of Social Science and Humanities [USSH],  
Vietnam National University, Hanoi [VNU])

実施責任者

Phuong Thuy Nguyen	東洋学部日本学科・専任講師
--------------------	---------------

京都大学

実施責任者

落合 恵美子	大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授
安里 和晃	大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット事務局長・准教授

担当教職員

河合 淳子	国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター・教授
西島 薫	学際融合教育研究推進センター・特定助教

#### 4.2 募集要項とポスター

##### 京都大学多文化共学短期[派遣]留学プログラム

2019年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクールのご案内

### Summer Intensive Course for Vietnamese Language and Culture 2019

**申 込 締 切： 2019 年 6 月 10 日 (月) 正**

#### 【日程】

2019年9月8日(日) ハノイ市到着  
9月9日(月)～9月20日(金): 講義および研修(於ベトナム国家大学)  
9月21日(土) 自由行動、出発  
9月22日(日) 帰国

【プログラム概要】 本プログラムは、ベトナムにおいて最も先駆的なベトナム国家大学ハノイ校に属する人文社会科学大学および同校外国語大学において、ベトナム語学習およびベトナム文化についての講義、文化体験、ベトナム語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供します。ベトナムの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解を身につけます。

#### 【募集詳細】

募集人数： 10名程度  
募集対象： 京都大学に在籍する正規の学部生および正規の大学院生  
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属の者を優先する)  
応募条件： 異文化体験・異文化学習に意欲を持つ者

#### 【費用】

参加費用： 12万程度※(学費、宿舍費、渡航費を含む)  
※為替レート、参加人数によって変動します。  
上記以外の自己負担：国内移動費、食費、個人的な諸費用、  
大学が定める海外留学保険加入費用  
(全員必須、治療・救援費用無制限)  
※最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します。

## 【奨学金】

JASSO 奨学金：70,000 円（若干名）

※JASSO の支給要件を満たす者（日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、成績・所得の基準を満たす者等）のうち、若干名に限ります。

## 【申込】

1. オンライン申請をおこなう（オンライン申請の手順については【別紙】参照）  
オンライン申請は下記 URL より行って下さい。

<URL>

<https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjmel1pepbt9/hbbQ7J/login.html>

※ログイン ID 及びログインパスワードは国際教育交流課に取りに来てください。

※http の後ろに必ず、s を入力してください。

2. 以下の書類を下記の申請書類提出先に提出する
  - a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの
  - b. 応募申請書（書式 1-1）
  - c. 語学力証明書（語学試験(英語)のスコアコピー）  
※スコアコピーがない方は締切の 2 週間前までにメールで相談すること。  
(2 週間を切っている場合は直ちにメールで相談してください。)
  - d. 成績証明書
  - e. 志望動機（書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4 1 枚程度）
  - f. 海外留学誓約書
  - g. パスポートの顔写真ページのコピー（有効期限は入国時 6 ヶ月以上必要。未取得者はその旨申し出、早急に取得）
  - h. 提出物チェックリスト

### (注) JASSO を希望する方へ

JASSO 奨学金を希望する方は別紙「JASSO 海外留学支援制度 奨学金申請について」をご覧くださいの上、国際教育交流課海外留学掛 青木までメールでご連絡ください。申請に必要な書類について案内します。

E-mail : ryuga-east.asia@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

メールタイトル : 『2019 ベトナム・ハノイ校サマーJASSO 希望』

本文 : 学部/修士、所属部局、学籍番号、学年、名前を明記のこと。

募集要項確認、各種書類は下記 URL からダウンロードしてください。

<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/>

<KULASIS> <https://www.k.kyoto-u.ac.jp/student/>

全学生向け共通掲示板→【留学情報はこちらをクリック】

申請書類提出先：教育推進・学生支援部 国際教育交流課海外留学掛 075-753-2488

(吉田本部構内 教育推進・学生支援部棟 1階 国際教育交流課)

【選考】 書類審査および面接によりおこなう。

【募集・選考スケジュール】

申込締切：2019年6月10日(月) 12:00(正午)

面接：2019年6月21日(金) 12:10-12:50(講義室1)

18:10-19:10(講義室1)

<面接予備日：6月24日(月) 12:10-12:50(講義室1)>

上記日程のうち1人10分程度(講義室は吉田南構内 吉田国際交流会館内)

最終結果通知：2019年6月24日(月)

オリエンテーション：2019年7月2日(火) 12:10-12:50(講義室1)(出席必須)

海外渡航安全説明会：2019年6~7月予定(出席必須) ※決まり次第通知。

【備考】

- ・本プログラムは以下の機関・事業により一人当たり計7万円の援助を受けて行われます。
  - (1) 京都大学アジア研究教育ユニットによる支援
  - (2) 京都大学重点アクションプランによる支援
- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・国際高等教育院附属 日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(2019年度前期：金曜3限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・海外旅行傷害保険については、指定の保険プランへの加入が義務付けられています。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「ベトナム研修」(アジア研究)の単位に充当される場合があります。
- ・本プログラムは『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成 から京都大学アジア研究教育ユニットおよび京都大学重点戦略アクションプランによって引き継がれた 支援体制のもとで行われます。

# ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール

Summer Intensive Course for Vietnamese Language and Culture 2018

プログラム日程：2019年9月8日（日）～ 9月22日（日）

## 募集説明会（申込不要）

日時：2019年5月24日（金）12:10～12:50

場所：吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室4

### 【日程】

- 9月8日（日） ハノイ市到着
- 9月9日（月）～ 20日（金） 講義および研修（於ベトナム国家大学ハノイ校）
- 9月21日（土） 自由行動、出発
- 9月22日（日） 帰国

### 【詳細】

- ・募集人数：10名程度
- ・募集対象：京都大学に在籍する正規の学部生および正規の大学院生  
（大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・  
アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先する）
- ・応募条件：異文化体験・異文化学習に意欲を持つ者
- ・費用：参加費用 **12万程度**（学費、宿舎費、渡航費を含む）  
（上記以外の自己負担）国内移動費、食費、個人的な諸費用、  
大学が定める海外留学保険加入費用（全員必須、治療・救援費用無制限）
- ・奨学金：JASSO奨学金 70,000円（若干名） ※ JASSOの支給要件を満たす者

### 【申込方法】

- ・申込み：次のHPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。  
<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasucpier.kyoto-u.ac.jp/>
- ・提出先：吉田本部構内 教育推進・学生支援部棟1階  
国際教育交流課 海外留学掛 075-753-2488



【申込締切】 **2019年6月10日（月）12時00分（正午）**

### 【本件照会先】

国際高等教育院 河合 淳子  
学際融合教育研究推進センター 西島 薫  
ryuga-east.asia@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp（「\*」を@に変更）

### 【備考】

- ・本プログラムは以下の機関・事業により一人当たり計7万円の援助を受けて行われます。  
（1）京都大学アジア研究教育ユニットによる支援  
（2）京都大学重点アクションプランによる支援
- ・同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・国際高等教育院附属 日本語・日本文化教育センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」（2019年度前期：金曜3限）を受講した上での参加を推奨しています。
- ・自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・海外旅行傷害保険については、指定の保険プランへの加入が義務付けられています。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の「ベトナム研修」（アジア研究）の単位に充当される場合があります。
- ・本プログラムは「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成」から京都大学アジア研究教育ユニット、及び京都大学重点戦略アクションプランによって引き継がれた支援体制のもとでおこなわれます。



### 4.3 研修日程

#### 2019 Vietnam In-Country Training

Period: 11th Sep-15th Sep (ULIS) 18th September-22th September (USSH)

Date	Time	Category	Curriculum/Event	Lecturer/Staff	Venue
Mon, 9th-Sep	9:15-9:45	開講	オリエンテーション	Dr. Nguyen Phuong Thuy	C201 号室
	9:50-11:40	聴講	日本地理 (ベトナム語)	Dr. Pham Hoang Hung	C504 号室
	11:45-15:35	共同	合同発表準備		C201 号室
Thu, 10th-Sep	9:50-11:40	講義	日本語研究入門(日本語・ベトナム語)	Dr. Nguyen Phuong Thuy	C504 号室
	11:40-14:00	共同	合同発表の準備		C201 号室
	14:00-16:00	講義	ベトナム語(2) (日本語・ベトナム語)	Dr. Pham Hoang Hung	C201 号室
Wed, 11th-Sep	9:30-11:30	講義	ベトナムの国家機関と法律システム [日本語・ベトナム語]	Dr. Nguyen Phuong Thuy	C504 号室
	11:30-14:00	共同	合同発表の準備		C201 号室
	14:00-16:00	講義	ベトナムの大衆文化 (日本語)	Dr. Pham Hoang Hung	C201 号室
Thu 12th-Sep	09:30-11:30	講義	ベトナム語(3) (日本語・ベトナム語)	MA. Duong Thu Ha	C201 会議室
	12:45-14:30	講義	日本語 (日本語・ベトナム語)	Itami	C504 会議室
	14:35-15:35	合同	合同発表の準備		C201 会議室
Fri 13th-Sep	Whole Day	研修	ドンラン村、ベトナム民族村	TASS 会社	
Sat 14th-Sep	Whole Day		自由行動		
Sun 15th-Sep	Whole Day		自由行動		
Mon 16th-Sep	8:30-9:30	共同	オリエンテーション+発表準備	—	—
	9:50-11:40	講義	ベトナム語	Bao Ngan	—
	14:45-15:35	講義	ベトナム語	Phuong Lien	—
Tue 17th-Sep	8:45-9:30	講義	ベトナム語	Dr. Vo Minh Vu	C201
	11:00-12:00	共同	共同発表準備		—
	13:00-14:35	講義	ベトナム語	Tuyet Ngan	—
	14:45-16:30	講義聴講	3B 会話 (2 年次)	Hoang Anh	C1-305
Wed 18th-Sep	Whole Day	研修	Trang An	旅行会社	
Thu 19th-Sep	8:45-10:50	特別講義	ベトナム語	Hoang An	—
	13:00-14:35	講義聴講	3C 会話 (2 年次)	Ha Luong	C2-106
	14:45-16:15	講義	ベトナム語	Tra My	—
	16:30-17:30	共同	共同発表準備	USSH 学生	—
Fri 20st-Sep	9:30-11:30	共同発表	共同発表+修了式		—
Sat 21st-Sep	Whole Day		自由行動		
Sun 22nd-Sep	VN330		帰国		

#### 4.3 参加学生一覧

班 長	氏 名	NAME	所 属	学年
	黄 海洪	HUANG HAIHONG	人間・環境学	D1
○	坂口 綺那	SAKAGUCHI AYANA	文学部	2年
	高比良 睦	TAKAHIRA CHIKA	文学部	2年
	中村 陸人	NAKAMURA RIKUTO	理学部	4年
◎	布浦 康平	NUNOURA KOHEI	文学部	4年
	流合 龍之介	HAGIE RYUNOSUKE	法学部	1年
	松本 愛	MATSUMOTO AI	教育学部	3年

## 4.5 ベトナム語会話教室

2018年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール (2018/08/24 ~ 09/06)

### ベトナム語教室レポート

TRINH THANH HAI

京都大学大学院医学研究科修士1年

多文化共学短期[派遣]留学プログラム「2018年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール」に参加する京大生向けのベトナム語教室について報告する。2018年8月24日から9月6日までの間、京都大学吉田国際交流会館において、ベトナム語教室が行われた。本ベトナム語教室はベトナム国のこと、及びベトナム語の概要を理解するのを目的とする。現地で過ごすのに実用的な知識と初級レベルのベトナム語を中心として授業を行った。具体的な内容は以下のとおりである。

#### 第一回：8月24日（2限）ベトナム語の基本

1. ベトナム語のアルファベットの紹介・発音の練習
  - 1.1 ベトナム語の29文字
  - 1.2 重母音
  - 1.3 声調記号の付いた母音
2. 基本的な挨拶の発音・練習

#### 第二回：8月28日（1限）

1. 基本的な挨拶の復習
2. ベトナムの記号の打ち方・辞書での調べ方
3. 数字
4. レストランと注文し方

#### 第三回：8月29日（3限）

1. 人称代名詞
2. 数字（講師か学生が数を発音し、他の学生たちが書き取る）
3. 料理を注文するときの会話（これは何の料理ですか。～をください。～はいくらですか。）ベトナムの代表的な料理の写真および紙幣の写真をみながら、白板に書いた会話の例文を参考にしてペアで練習する。

#### 第四回：9月3日（3・4限）

1. ハノイの地図  
地図に関する基本的な語句の紹介。ハノイの地図を読み、現地で行動する場所を探す。現地で有用な場所（学校・ホテル・よく使う道の名前）の発音を練習する。  
タクシーで役に立つ会話の練習
2. 学生さんが観光したいところを各自で検索して紹介してもらう

#### 第五回：9月7日（3・4限）

1. 実用的な会話の練習
  - 1.1 ホテルのフロントでの会話
  - 1.2 タクシーにて
  - 1.3 買い物
2. ハノイに関する豆知識
  - 3.1 両替
  - 3.2 看板の写真

### 3.3 Grab や Uber などの交通手段

使用した教材は漫画付きでかなり面白い「旅の指さし会話帳 11 ベトナム」という本、であった。写真・動画や音楽などを教材として使用した。今回はベトナム語というよりベトナムの文化などへの理解を中心とした授業なので、学生達がある程度楽しく勉強してもらったと思う。本年度の学生たちは文学部の学生が多いせいも、まじめに積極的に授業に参加してくれた。

授業では、学生たちはハンドアウトに載せた内容を理解した上で、単語リストと例文・会話例を参考にしながら、ベトナム語または日本語に訳したり、ペアで会話の練習をしたりした。また、発音しにくい表現の練習にも努め、発音やベトナムのことについて積極的に質問してくれた。辞書で調べたり教室で習った文法を参考にしたりしながら、自分なりの自己紹介を作成して音読してくれた。ベトナムの文化およびベトナム語に対する関心が高いと感じられ、本教室の目的はある程度達成されたと思われる。

## 4.6 共同発表

日時：2019年9月21日（木）13:00～15:45、場所：ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学

担当教員： Dr. Võ Minh Vũ（USSH 東洋学部日本学科・専任講師）

MA. Lê Thị Minh Nguyệt（ULIS 日本語文化学部日本語部門・専任講師）

### 1. 「米から作られたもの」

中村陸人	京都大学理学部 4年
松本 愛	京都大学教育学部 3年
Tran Thi Ngoc	ベトナム国家大学ハノイ校 USSH
Vu Thi Loan	ベトナム国家大学ハノイ校 USSH
Tran Thi Ngoc Anh	ベトナム国家大学ハノイ校 ULIS
Nguyen Thi Thuy Huong	ベトナム国家大学ハノイ校 ULIS
Nguyen Thanh Tra	ベトナム国家大学ハノイ校 ULIS

### 2. 「技能実習生」

黄海洪	京都大学人間・環境学研究科 1年
布浦康平	京都大学文学部 4年
Phan Thi Huong Giang	ベトナム国家大学ハノイ校 USSH
Doan Thi Hong Ly	ベトナム国家大学ハノイ校 USSH
Nguyen Thi Ngoc Trang	ベトナム国家大学ハノイ校 ULIS
Nguyen Quynh Huong	ベトナム国家大学ハノイ校 ULIS

### 3. 「ベトナムと日本の SNS の利用」

流合龍之介	京都大学法学部 1年
高比良睦	京都大学文学部 2年
坂口綺那	京都大学文学部 2年
Kieu Bang Ngan	ベトナム国家大学ハノイ校 ULIS
Nguyen Thi Khanh Huyen	ベトナム国家大学ハノイ校 ULIS
Vu Thi Thu Hang	ベトナム国家大学ハノイ校 USSH
Vi Thi Thuy Linh	ベトナム国家大学ハノイ校 USSH

## 4.7 担当教員所感

### 京都 SEND 2019 について

Le Thi Minh Nguyet  
ハノイ国家大学・外国語大学  
日本語文化学部

本年度のプログラムは、特に学生交流という場において、大変印象深かったと思います。本年度のプログラムでは、両大学の学生を交流させるというのが一番大きな目的となりました。したがって、ほとんどの活動はできる限り両大学の学生が交流し合う場として設定しました。

本年度の活動は二つに分けられます。一つはベトナム語講座、もう一つはベトナム人学生との共同学習です。ベトナム語講座では、京都大学生は日常的な会話でよく使われるベトナム語を学びました。特に、ベトナム語は前年より学習時間が増え、合計 12 時間勉強しなければならないこと



になりました。共同学習の授業参加では京都大学生は外国語大学・日本語文化学部の学生と共に会話授業を受けました。

共同発表のために準備作業は数回にわたって行われました。三大学の学生は活発な意見交換を行い、自信を持ちプレゼンテーションをすることができました。実地研修では、学生は世界遺産であるチャンアンに行き、小船に乗って、幻想的な山々や鍾乳洞の洞窟を巡り、ベトナムの自然さに感動した。

今回のプログラムに参加したほとんどの学生は日本で初対面して、両大学の学生同士はすぐに仲良くなりました。京都大学生のみなさんも早くベトナムの生活環境に慣れて、2週間ベトナムで楽しんでいたと実感しました。

ハノイ国家大学・外国語大学では、近年学生交流が増えており、日本をはじめ世界中から学生を受け入れています。京都 SEND プログラムは京都大学生だけでなく、外国語大学生にとっても貴重な体験だと思います。このようにたくさんのメリットを考え、今後とも両大学の学生の交流する場を作らせていただければ幸いです。本年度の参加した学生にはこのプログラムで得た知識や経験をいたして、社会に貢献してほしいと願っております。

## Về chương trình KYOTO SEND 2019

Chương trình năm nay đã để lại nhiều ấn tượng tốt đẹp. Mục tiêu chính của chương trình là giao lưu trải nghiệm nên các hoạt động đều được lên kế hoạch để đảm bảo sinh viên các trường được tạo điều kiện tốt nhất để tham gia các hoạt động giao lưu.

Trong khuôn khổ chương trình, các sinh viên được tham gia hai hoạt động: học tiếng Việt và tham gia giờ học tiếng Nhật cùng với các sinh viên Việt Nam. Trong giờ học tiếng Việt, các sinh viên trường Kyoto được học từ vựng và các câu hội thoại thường ngày đơn giản. Thời lượng học tiếng Việt trong chương trình năm nay được tăng lên so với năm trước, tổng số giờ học tiếng Việt là 12 giờ. Trong các buổi tham gia giờ học, sinh viên Kyoto được học chung với các sinh viên chuyên ngành tiếng Nhật trong giờ học hội thoại.

Để chuẩn bị cho buổi phát biểu chung, sinh viên đã có các buổi trao đổi ý kiến, tiến hành thảo luận sôi nổi. Trong buổi phát biểu chính thức, các nhóm rất tự tin thuyết trình chủ đề mình. đã chuẩn bị. Trong chuyến tham quan đến Tràng An, một di sản văn hoá thế giới, các sinh viên Nhật Bản được trải nghiệm khám phá cảnh sắc thiên nhiên của Việt Nam, ngồi thuyền dọc theo dòng sông ngắm những dãy núi hùng vĩ và động thạch nhũ đẹp huyền ảo.

Các sinh viên tham gia đợt giao lưu này phần lớn đều đã gặp nhau ở Nhật và đã dễ dàng trở nên thân thiết với nhau. Các sinh viên Đại học Kyoto cũng đã nhanh chóng làm quen với cuộc sống ở Việt Nam, và có thể cảm nhận được rằng các em đã rất thích thú được khám phá Việt Nam trong hai tuần này.

Trường Đại học Ngoại ngữ, Đại học Quốc gia Hà Nội những năm gần đây liên tục tăng cường hoạt động giao lưu sinh viên, tiếp nhận sinh viên nước ngoài sang giao lưu, trong đó có sinh viên Nhật Bản. Chương trình KYOTO SEND không chỉ là trải nghiệm quý báu đối với sinh viên Kyoto, mà đối với sinh viên Đại học Ngoại ngữ cũng là hoạt động giao lưu nhiều ý nghĩa. Chúng tôi mong rằng những hoạt động giao lưu như vậy sẽ được tiếp tục duy trì. Chúng tôi cũng mong rằng những sinh viên đã tham gia chương trình giao lưu này sẽ sử dụng những kiến thức và kinh nghiệm có được từ chương trình để đóng góp nhiều hơn cho xã hội.

## 2019年度の多文化共学短期留学プログラム

京都大学の先生方、学生の皆さん。

人文社会科学大学は 2019 Vietnam In-Country Training プログラムおよび多文化共学短期留学プログラムの一環として京都大学の学生の皆さんを2019年9月9日から9月12日まで本学にて受け入れました。



本学において、京都大学の学生は、四日間、3回のベトナム語の講義、「ベトナム国家機関と法律システム」、「ベトナムの大衆文化」と題するベトナムに関する各専門講義を受け、本学東洋学部日本研究学科の「日本地理」、「日本研究入門」と「日本語」の授業を聴講しました。聴講した授業において、本学の学生と交流することもできました。一生懸命、勉強したのちには、国家文化財と認定されているドンラム村で、ハノイ郊外の人々の生活、ベトナム民族村におけるベトナムの各民族の特徴的な建物などを見学・体験しました。

9月20日、京都大学の学生さんは、外国語大学の大学生さん、本学の学生さんとともに、3つのグループに分かれ、「日本とベトナムのお正月」、「米から作られたもの」と「ベトナム人技能実習生の問題：日本とベトナムの両視点から」というテーマについて発表しました。発表の内容は素晴らしく、3大学の学生さんは、一生懸命、一緒に準備したことが伺えました。日本またはベトナムに関わる知識だけでなく、チームワーク能力も高められたと言えます。

本学の学生さんが世界のことをより正しく理解し、世界各地の友達たちにベトナムのことを広く紹介し、グローバル化に対応できる人材育成を進めることができるように、人文社会科学大学においては、外国大学の学生との交流活動が大事にされてきました。そのため、今後も京都大学との交流プログラムのようなプログラムが実施されることを期待しています。どうもありがとうございました。

NGUYEN PHUONG THUY

(グエン・フオン・トゥイー)

ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学

東洋学部日本研究学科



## **Chương trình du học ngắn hạn**

### **Cùng học đa văn hoá năm 2019**

Thân gửi các thầy cô và các em sinh viên trường Đại học Kyoto, Từ ngày 09/9 đến ngày 12/9/2019, Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn đã hân hạnh được đón tiếp các em sinh viên thuộc Chương trình Thực tập tại Việt Nam năm 2019 và Chương trình du học ngắn hạn Cùng học đa văn hoá đến học tập tại trường.

Trong 4 ngày, các em sinh viên đã có 3 buổi học tiếng Việt, 2 buổi học chuyên môn về Việt Nam là “Hệ thống cơ quan Nhà nước và pháp luật Việt Nam”, “Văn hoá đại chúng ở Việt Nam” và dự thính 3 giờ học của các bạn sinh viên chuyên ngành Nhật Bản học, khoa Đông phương học gồm “Địa lý Nhật Bản”, “Nhập môn nghiên cứu Nhật Bản” và “Tiếng Nhật”. Trong 3 giờ học dự thính này, sinh viên hai trường đã có hoạt động giao lưu. Sau 4 ngày chăm chỉ học tập, các em sinh viên Đại học Tokyo đã trải nghiệm về cuộc sống của người dân ngoại thành Hà Nội ở làng Đường Lâm –nơi đã được công nhận là di sản văn hoá quốc gia và những ngôi nhà mang đặc trưng của các dân tộc Việt Nam tại Làng Văn hoá các dân tộc Việt Nam.

Vào ngày 20/9, 3 nhóm sinh viên của Đại học Kyoto, Đại học Ngoại ngữ và Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn đã có bài thuyết trình về 3 chủ đề gồm “Tết của Nhật và Việt Nam”, “Những thứ làm từ gạo” và “Vấn đề thực tập sinh kỹ năng người Việt- Nhìn từ góc độ của Nhật Bản và Việt Nam”. Để có được những nội dung phát biểu tuyệt vời như vậy, chắc chắn rằng các bạn sinh viên của cả 3 trường đã cùng nhau miệt mài chuẩn bị. Có thể nói rằng, không chỉ kiến thức về Việt Nam và Nhật Bản cả tinh thần làm việc nhóm của các bạn đã được nâng cao.

Để sinh viên của Nhà trường hiểu chính xác hơn về thế giới, giới thiệu rộng hơn về Việt Nam đến bạn bè quốc tế cũng như thúc đẩy đào tạo nguồn nhân lực có khả năng đáp ứng được nhu cầu của toàn cầu hoá, tại Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn luôn coi trọng các hoạt động giao lưu với các trường đại học nước ngoài. Do vậy, chúng tôi hy vọng các chương trình giống như chương trình giao lưu với Đại học Kyoto năm 2019 sẽ tiếp tục được thực hiện. Xin trân trọng cảm ơn

TS. Nguyễn Phương Thuý

Bộ môn Nhật Bản học, Khoa Đông phương học

Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn, Đại học Quốc gia Hà Nội

## 4.8 参加学生報告

### 「ベトナム国家大学ハノイ校派遣参加報告書」

人間・環境学研究科 D1

黄海洪

ベトナムは以前にも一度旅行で訪れたことがあります。旅行の主な目的は、旅先の特有の自然、文化を見たり触れたりすることとその地域で特異な体験をすることになると思います。今回は学生ビザで、ベトナム国家大学ハノイ校に2週間滞在しました。2週間の間、語学の習得、異文化体験など、学びを中心としたものが多くありました。

今回のプログラムに参加する前に、記憶の中のベトナムはデュラスの『愛人（ラマン）』の中のメコン河、トラン・アン・ユンの『夏至』の中のハロン湾、そしてアン・ホイの『Boat People』の中の戦争直後のダナン町で構成されていました。2週間で滞在してみると、それまでの私のベトナムイメージがいかに観念的だったのかを痛感させられました。

ベトナムはアジアのラテンアメリカだという人もいます。世界銀行の最新調査によりますと、ベトナムの平均年齢は31歳で、平均年齢46歳の日本と比較しますと、ベトナムは若者が非常に多く、活気に満ちた国であることが容易にわかります。日本で3年から5年の技能実習を目的とした技能実習生の数は近年、中国を抜いてベトナム人が一番多くなっています。今後もベトナム人は日本にとって、ますます身近な存在になっていくでしょう。

今回訪れたハノイはベトナムの政治と文化の都です。ハノイは人口約800万で、市民の移動手段はほとんどバイクと車です。ベトナムの特質を「水」にたとえる研究者もいます。融通無碍なベトナムでは、水をあらわすベトナム語の「ヌオック」は同時に「国」という意味があります。ハノイの道路では、バイクや車が一見無秩序に各自の行きたい方向に走っているように見えますが、お互いにぶつかることもなく、それなりに交通が流れています。それもベトナム文化における「水」の特質の表れだと言えるかもしれません。ハノイからバイクがなくなるはとも思いませんが、ベトナム政府は鉄道などを整備して、2030年に「バイク全廃」を目指しているそうです。

ベトナムというと、浮かんでくるものの1つがベトナム戦争です。ベトナムはもうすぐ終戦50周年を迎えます。ハノイの街中では、ベトナム戦争はすっかり遠い過去のように思えます。旧市街は昔ながらに、ブロックごとに同じ商売が行われています。うなぎの寝床というような細長い建物が多く、2階建てから5階建ての家々が隙間なく立ち並んでいます。時折、手彫りのハンコ屋さんを見かけます。外資の工場が次々にベトナムに参入しているのは、ベトナム人の手先の器用さに一目を置いているからでしょう。

ベトナムの政治体制と経済政策は中国と類似しているところが多くあります。経済政策では、1986年に、「ドイモイ（刷新）政策」と呼ばれる市場経済を導入して以来、年々高い経済成長を遂げています。ベトナム政府の発表によりますと、2018年の実質GDP成長率が7.1%で、過去10年間でもっとも高い成長率を記録しました。急激に発展しているベトナムは、ASEANの優等生として、東南アジアでの地位を確立しています。

歴史文化の面においては、ベトナムはかつて1000年にも渡って中国に属していました。紀元10世紀、中国から独立を達成しましたが、以降、15世紀初頭に20年あまり中国の明朝の支配下に置かれていました。その影響で、ハノイでは今でも、漢字は古い建物に残っているのですが、漢字を読めるのはごく一握りの人のみらしいです。また、19世紀の後半に、ベ

トナムはフランスに植民地として支配されました。フランスによる占領は、ベトナムの食文化に大きく影響しました。バインミーは今やベトナムの国民食とも言える食べ物の1つです。

今回のサマースクールプログラムは、大きく①ベトナム語・ベトナム基礎知識の座学講義、②日本語授業への参加、③学外における実地研修、④現地の学生との相互学習・共同発表といった4つの部分によって構成されていました。個人的に、一番印象に残ったことは日本語授業への授業参加です。日本語を勉強し始めて1年という学生たちでも発音や文法などの間違いをおそれずに、一生懸命日本語で話しかけてくれるという点に感銘を受けました。日本語を勉強しているベトナムの学生とたくさん日本語学習に関する会話ができてとても有意義でした。また、非漢字圏の日本語学習者にとっての漢字の難しさと漢字教育の重要性を改めて認識しました。

「万巻の書を読み、万里の道を行く」、これは明代の董基昌の名言です。「たくさんの本を読んで博学多識になり、旅をいっぱいして体験を積む」という意味で、座学と共に広い世界に飛び出して様々な経験を積むことの大切さを説いた言葉です。これからも、できるだけ多くの本を読んで世界中の様々な国を訪れたいと思います。

### 「ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

文学部2年

坂口綺那

ハノイで2週間過ごして思ったのは、とても賑やかであることだ。とにかくバイクが多い。一度外に出れば、クラクションの音を聞かないことはないし、横断歩道を渡るのも一苦労。日本ほど公共交通機関が発達していないベトナムでは、バイクが主要な移動手段なのだ。また予想以上に高層マンションが多く、工事現場も見かけ、急速に開発が進んでいるのを肌で感じた。

街の様子に違わず、人々も明るく元気だ。道端では行商人や若者たちの交わす元気な声が聞こえる。最初はベトナム語が全く分からず、早口でまくし立てる彼らの様子に多少の恐怖心さえ抱いていた。しかし数字など少し聞き取れるようになると何となく会話の内容が想像できるようになって、安心感と嬉しさが生まれた。

また本プログラムにおいて、人文社会大学と外国語大学で現地学生の日本語授業に参加させていただいた。主に2年生の授業であった。みんな明るく、積極的に私たち日本人に話しかけてくれた。たどたどしいながらも、どこから来たの？という質問や何を学んでいるの？という質問を投げかけてくれて嬉しかった。

そして学生サポーターの方々は明るく親切で本当によくしてもらった。現地で特に不自由なく生活できたのは彼女らのおかげである。忙しい中、放課後や休日に観光地を案内してくれたり、時には自分のクラブ活動に誘ってくれたりした。私たちの移動手段であったタクシーの手配や、買い物や食事の時に通訳の役割をしてくれた。彼女らは日本語が本当に堪能で、ベトナム人と会話しているということを忘れるくらいであった。例えば博物館に連れて行ってもらったときには、すべて日本語で丁寧に解説してくれた。英語もままならない私にとって、彼らの語学力には本当に舌を巻く思いだった。彼女らと交流し、ベトナムの交通事情や文化、学生生活や進路など、ただ観光するだけでは知ることはなかったであろうことを学ぶことができてよかった。さらに母語以外の言語を身につけることで、外国の方々との交

流が円滑かつ豊かになる可能性について身をもって体験できたのはよい刺激となった。今後、英語や他の言語を学ぶモチベーションにつながったと思う。

そもそもこのベトナム研修に私が参加したのは、ベトナムの文化、特に食に興味があったからだ。それで個人的には「ベトナムの食」というテーマを掲げていた。2週間の滞在でいろいろなベトナム料理を口にしたが、印象に残ったのは米麺の存在だ。一口に米麺と言ってもその形状から、フォー、ビーフン、ブン、フーティウなど様々な種類がある。屋台のメニューには大概フォーがあり、ホテルや大学周辺でもフォーやブンのお店がある。また、ホテルの朝食にもフォーが出てきたことから、ベトナム人にとって米麺は欠かせない食なのだと感じた。さらに、大皿に盛られた料理をみんなでシェアするのがベトナムスタイルの食事だと学び、中国風文化が根底にあるのだと感じた。たしかに訪れた寺院はどれも中国風建築であったし、街の中にも中国風の廟を見かけた。このように本場の味を楽しみ、総合的に文化を体感できたのは、実際に2週間も滞在できたからだと思う。ただ、今回の渡航を通してだけではまだまだベトナムの文化について的一端しか知ることができなかったもので、今後とも学んでいきたいと思う。

最後に本プログラムでは家族や先生、学生など本当に多くの方々にお世話になり、貴重な体験をさせていただいた。今渡航を通して、つくづく自分は幸せ者だと思われた。本当にありがとうございました。そして、この充実した2週間の経験を今後にぜひ活かせるよう努めていきたい。

### 「ベトナム派遣参加報告書」

文学部2年  
高比良睦

ベトナム国家大学サマースクールの二週間のうち、最初の一週間は人文社会大学、後の一週間は外国語大学に行き、ベトナム語の授業を受けたり、ベトナム人学生の受講する授業に参加したりした。ベトナム語の授業は、一つの文法事項につきたくさん例文を取り上げて実際に話してみるなど、実生活に役立てやすい形で勉強できたのがとても良かった。休日には、ベトナム人学生にハノイ旧市街等様々な場所に連れて行ってもらうなど、たくさんベトナム人学生と交流する機会があった。

平日の学校や休日出かける際にベトナム人と交流していて一番印象的だったのは、皆日本語がとても上手であるということだ。私たち京都大学から派遣された学生はベトナム語を学び始めたばかりであって、ベトナム語でコミュニケーションを取るのが難しかったため、ベトナム人の学生たちはいつも日本語で話かけてくれた。迎えてくれるベトナム人が日本語で話しかけてくれるのに、ベトナム語が全然話せない自分をもどかしく思った。また、人文社会大学や外国語大学では、ベトナム人学生が日本語を学んでいる授業にも参加したが、そこでは日本語を学び始めてまだ2年目という学生たちと日本語で会話をした。私も第二外国語であるドイツ語を学び始めて2年目になる。ドイツ語を使って会話をできるだろうかと考えたが、それはとても難しいことだと思った。もちろん読むことを中心に勉強していたり会話を重視していたりする等の違いはあるかもしれないが、ベトナム人学生たちは、日本語を学ぶ意欲がとても高いと感じた。私はその姿勢を見習わなければならないと思った。普段の自分を見つめ直す良い機会になった。話を聞いていると、日本語を学んでいるベトナム人学生の中で、日本でまたは日本企業で働きたいと考えている学生が多かった。このように将来したいと思っていることに直接関係があるからこそ、勉強に積極的に取り組むことができている

るのだと感じた。私も、いま学んでいることが活かせるような進路を見つけてそれに向かって努力していきたい。休日には、一度歴史博物館に連れて行ってもらい日本語で解説してもらったことがあるが、ベトナム語の展示では理解できなかったことも話してもらえて知ることができた。また、直接話を聞くことでより楽しむことができた。このことから、改めて言語の大切さを感じた。日本語は世界で見ると主要な言語ではないし、日本の歴史や文化に興味を持ってもらいたい、伝えたいと思った時、ベトナム人の学生がそうしてくれたように、私たち日本人側が努力しなければならないと思った。私は今回ベトナム人の学生たちにしてもらったように、日本と外国の人をつなぐ役割ができたらと考えるようになった。

### 「ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

理学部 4年

中村陸人

今回のプログラムが初めての海外経験で、ベトナムの文化を実感するとともに改めて日本の文化を見直すきっかけとなった。特に、言語の面での違いを改めて意識させられた。実際に現地に行く前には、カタカナ読みでベトナム語を話せたら何とかなるだろうと考えていた。しかし、大学での授業や現地の人々との交流を通じて声調や発音も含めてきちんと話せないに通じないことを知った。声調の違いで意味が変化することも多いからだ。それでも2週間無事に過ごすことが出来たのは、現地のサポーターの方が日本語でサポートしてくれたからである。私の拙いベトナム語を理解し、できるだけ日本語で話そうとしてくれた現地のサポーターに感謝したい。そして、今度海外に行くときは他の人に頼らずに済むように、事前の準備を入念にしようとするようになった。今度は発音や声調もきちんと学び、自分一人でも現地で生活できるように今後ベトナム語をより学習していきたい。

共同発表ではベトナムと日本の米文化について発表した。同じアジア圏に属するベトナムも日本も米を主食としているが、両国の米文化にどのような違いがあるのかを明らかにするためだ。とくに記憶に残っているのが、フォーというベトナム料理の名前の語源がフランス語から由来するかもしれないという説だ。ベトナムの米文化が植民地支配で影響を受けていたのかもしれないと思った。そのような植民地支配により、日本とベトナムの米文化の違いが生まれたのかもしれない。

今回が初めての海外経験であったが、印象的だったのは意外と英語が通じないということである。もちろん空港や現地の大学内では大抵の場合英語が通じたが、それ以外の場面でベトナム語以外通じないということが案外多く驚いた。英語が世界共通語であることは疑いのない事実であるが、それでも通用しないことがあるので現地の言葉を話せることの意義を改めて実感した。また現地の言葉を使えることで、よりその国についての理解が深まると思うので、その点でも現地の言葉を話せることが重要だと思う。

主な内容はベトナム国家大学ハノイ校の人文社会大学と外国語大学で、日本語やベトナム語による講義を受けることである。現地の学生や、偶然同じ時期に留学に来ていた昭和女子大学からの留学生と共に授業を受け、よりベトナム語やベトナム文化に対する理解を深められた。現地の学生からはベトナムの学習に関する文化について、昭和女子大学からの留学生からはベトナムと日本との学習スタイルの違いについて話を伺えた。

また、実地研修を通じて、古くからあるベトナムの風習や文化について学習できた。ドンラム村やベトナム民俗村ではベトナムの衣食や少数民族の生活習慣について理解を深める

ことが出来た。Trang An ではベトナムのお寺等を訪れ、ベトナムの建築様式について理解を深めることが出来た。

私はこれまで海外経験が無かったこともあり、世界情勢を常に日本の観点からでしか意識していなかった。しかし、今回のプログラムを通じて、ベトナムから見た日韓関係や日中関係について現地の学生や先生から話を伺い、日本という国を国際的観点から客観的に見つめる機会になった。この経験はこれまで日本の立場に偏った報道しか見てこなかった自分にとって新鮮な経験であった。今後は日本のためだけでなく、世界の中の日本としてどうあるべきかを考えられるような人間になりたいと思った。そして日本だけでなく海外で勉強あるいは、生活してみたいと思えるようになった。将来はベトナムも含め様々な国々で経験を積み、世界規模でより適切な判断ができるようになりたい。

### 「2019年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

文学部4年  
布浦康平

今回、このプログラムに参加したのは、異文化に触れることで何か得られるものがあるのではないかと考えたからだ。1週目は人文社会科学大学 (USSH)、2週目は外国語大学 (ULIS) で授業を受けたが、サポーター含め様々な学生と交流するなかで、異文化に触れるという個人的な目標は一定程度達成できたのではないかと感じている。それと同時に、現地の学生たちの手を借りて異文化に「触れる」だけでなく、現地で生活できるレベルにまで到達する、つまり異文化に「溶け込む」ことができれば得られるものがさらに大きくなるのであろうと思った。この点については、社会人として将来取り組んでみたい。海外を訪れることは初めてではないが、今回のサマースクールほど鮮烈に異文化を感じることはこれまでになかった。

プログラム内容としては、1週目のUSSHと2週目のULISで少し内容が異なる。USSHでは、ベトナム語を学ぶことはもちろんであるが、それよりもベトナムという国のことを学ぶことに重きがおかれていたように個人的には感じている。ULISは、ベトナム語を学ぶことに特化したプログラムであった。そして、どちらの大学でも合同発表の準備の時間が設けられていた。授業最終日に行われる合同発表に向けて準備を進める過程・発表本番では、USSH、ULIS、京都大学の学生が共同して課題に取り組むことができていたと思う。発表は日本語で行うが、私達が普段何気なく使う日本語の表現はベトナム人にとって難しくないか、どう表現すれば伝わりやすいかというところには心を砕いた。私が属していた班、他の班ともに良い発表ができたと感じている。

日本語を学んでいる学生であるとはいえ、USSH、ULISの学生の日本語運用能力の高さには驚きの連続であった。方や自分を振り返ってみると、中学校1年生から英語を授業で習っているというのに、カタコトの英語を話すのがやっとというレベルである。ベトナム語は言わずもがなである。ベトナム語の理解が不十分であるために苦労する場面は何度かあった。日本でベトナム語をもう少し勉強して行くべきであったというのは今回のサマースクールにおける個人的な反省点である。ハノイ滞在するにあたり、買い物で使う表現や移動するのに必要となる表現ぐらひは最低でも準備して行くべきであった。

今回のプログラムでは、授業をしてくださった先生方をはじめ、毎日色々な場所を案内してくれた学生、滞在先のホテルのスタッフなど様々な方々にお世話になった。特に、忙しいなかサポーターを務めてくれたUSSH、ULISの学生には感謝をしてもしきれない。2週間とい

う短い期間であるものの、彼ら彼女らと育んだ友情を絶やさぬよう、さらに深めていけるよう努めたい。そして、彼ら彼女らが日本語でそうしてくれたように、いつか私が彼ら彼女らに対し、ベトナム語で日本を案内できるようになりたい。また、今回のサマースクールの期間だけでは、見る事・行く事・感じる事ができなかったベトナムの場所や文化もたくさんある。私も再びベトナムに行き、彼ら彼女らに会う機会を持ちつつ、それらの場所や文化に触れ、溶け込みたい。

### 「ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

法学部1年  
流合龍之介

ベトナムの道路は面白かった。信号が赤になったのに車やバイクは止まろうとしない。横断歩道が青になったのに、人が渡っているのに、やはり車やバイクは止まることを知らない。車やバイクからは、人をひいてでも進もうとする固い意志のようなものを感じた。一方の歩行者も、道路を譲るつもりはない。交通の流れの一瞬のスキについては、車を物ともせず道路を渡っていく。負けず劣らずの固い意志だ。しかし、この両者が対峙した時、不思議なことが起こる。歩行者との距離僅かで車やバイクはうまくかわしていく。歩行者も同様に車やバイクをかわす。その様はまるで川の流れのようだった。

ベトナムの人も面白かった。今回たくさん交流をさせていただいた、現地の日本について学ぶ学生さんたちは、とにかく自己主張が強かった。今回のプログラムの内容としては、ハノイ校の中でも、人文社会科学大学と外国語大学にお邪魔させていただき、日本についての授業をベトナムの学生と一緒に受けたり、京大生のみを対象としたベトナム語講義を受講したりしたが、中でもベトナムの学生と協力して、独自のテーマについてプレゼンする合同発表が印象に残っている。合同発表のテーマについて話しているとき、僕たちが日本で考えていたものに対してははっきりと意見をぶつけてくる。そして、現地の学生さんがしたい内容を臆さずに話す。しかし、こちらの考えは尊重してくれる。他にも、ホテルの人は、朝食会場で毎日目玉焼きとフォーを薦めてくるが、断っても嫌な顔一つせず、逆に欲しいという嬉しそうな笑顔を見せる。自分の意志は固持しつつも相手の思いに柔軟に対応するその姿は、道路同様川の流れを彷彿させた。

ベトナムでは、水をとても大切にしている。農業が盛んであった昔に建てられた建物の屋根には、水を司る龍を模した置物があり、その龍は、ベトナム四霊獣の筆頭とされるほどである。また、ベトナム語で国を表す“*nuóc*”には、別に水の意味があることから、水を大切にしていることがわかる。

この短期留学を終えた今、自分以外の人は何を思っているのか理解できるようになりたいという当初の目的を果たすために、あえてベトナム人をひとくくりにして言い表すとしたら、彼らは水のような存在である。日本人に多くみられる、他人からの視線に臆する様子も、自分の考えを否定されて過剰に気に留める様子も、彼らからはあまり感じられなかった。どちらがいいということではなく、ただ水のように生きるベトナム人に感動し、それを踏まえて彼らと触れ合い、相手の考えに耳を傾けられるようになったこの2週間に、ちょっとした達成感を抱いている。

今後は、もちろんハノイにもう一度行きたいと思っているが、ハノイ以外の都市やベトナム以外の国にも目を向け、様々な人の考え方に触れてみたいとも思っている。法学部では学べないことをいろいろ吸収していきたい。

最後に、この短期留学にあたり、プログラムを企画、実施して下さった京都大学とベトナム国家大学ハノイ校の方々、現地で様々なところへ連れて行って、合同発表に協力してくれた学生の方々、海外渡航を許してくれた家族、そして2週間一緒に過ごしてくれた京大生の方々に感謝の気持ちを示して、報告書の締めとする。

## 「ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

教育学部3年

松本愛

今回、9月の半ばに2週間ベトナム国家大学ハノイ校にて、現地の学生と交流しながらベトナムや日本について深く学んだ。それとともに、日本では出来ないような多くの経験から刺激を受けた2週間であった。プログラムの具体的な内容としては、まず1週目は人文社会大学で主にベトナムの文化や歴史を学び、2週目は外国語大学でベトナム語を学んだ。それぞれ、基本的には日本人学生のための授業であったが、何度かベトナム人学生の受ける授業にも参加し交流を深めた。ベトナム人学生は皆、初対面の私たちに積極的に話しかけてくれたため、はじめ緊張していた日本人学生もすぐに溶け込めたように思う。

授業に関して、日本人学生は渡航前にベトナム語の勉強やベトナムの基本知識の獲得は済ませていったが、やはり実際にベトナム人の先生に習ってみると、分かりやすいだけでなくその奥深さや面白さまで感じる事が出来た。また、週に1度は課外研修が行われ、ベトナムの伝統的な村や自然が作り出した壮大な湾などを、現地の方の説明を聞きながら観に行くことが出来たのは、貴重な経験となった。どの実地研修においてもベトナムの長く複雑な歴史や環境を学び、時には明るく、時には暗い過去に深く考えさせられた。

大学の講義や実地研修にて様々な経験をさせていただいたが、私が今回の2週間で最も刺激を受けたのは、何よりもベトナムの学生たちの存在だ。授業だけでなく、放課後や休日などは様々なところへ遊びに連れて行ってくれるなど密な時間を彼らと過ごしたが、彼らの明るさ、気遣い、熱心さ、知識の豊富さ、語学力、驚かされることばかりだった。日本人学生同士でさえお互いに初対面で緊張していたにもかかわらず、その中にベトナム人の学生は自然と溶け込み、日本人同士の仲まで取り持ってくれたように思う。私は初めてのベトナムで環境の変化に体がついていけない時も、すぐに気づき気遣ってくれた。また、日本に関する知識量の豊富さにも驚いたが、彼らにとって自国であるベトナムについてもよく勉強していると感じた。ベトナム女性博物館へと連れて行ってくれた時、展示品一つ一つに対して丁寧に説明してくれた時には感動した。私は海外の人とコミュニケーションを取りたいと思った時、相手の国のことばかり調べていたように思う。実際、今回ベトナムに行く際もベトナムについての本は何冊か読んでいった。しかし、彼らが知りたかったのは日本であり、日本人としての声だった。日本について深く知りたいと思う良い機会になったと思う。

そして、彼らの語学力には頭が上がりなかった。渡航前は英語を加えたコミュニケーションを取るのだと思っていたが、現地では学生との交流はすべて日本語だった。それほどに全く違和感のない流ちょうな日本語を話していた。それだけでなく、英語、中国語など複数か国語を話せる人がほとんどであった。語学を学ぶことで、こんなにも人との交流範囲が広くなり、且つ視野も広がることを、彼らを見て実感した。語学を真剣に勉強したいと心から思った。

渡航前は、自分にはない価値観に触れてみたくて、自分の知らない環境に身を置いてみたくて、ただその一心でこのプログラムに参加した。実際2週間を通して、人との関わり方や



ものの考え方に変化が見られたように思う。具体的には、より積極的に、そして細かなところまで意識がいくようになった。それほどまでに沢山の刺激に溢れたプログラムだったと思う。しかしながら、今振り返ると反省点もある。私は刺激が欲しい、新しいものに触れてみたいなどといった自分の欲求ばかりを優先させてはいなかっただろうか。ベトナムの学生たちは、私たち日本人学生と交流して何か得たものはあっただろうか。次海外の学生と交流するとき日本のことも十分に話せるよう、日々の生活を意識して過ごしたい。

最後に、このプログラムを主催してくださった先生方、共に参加した日本人学生、そして何よりも、現地で私たちをサポートしてくださった学生の皆さまに、心から感謝いたします。ベトナムの学生たちにまた会えるよう、ベトナムのことも日本のこともこれから勉強していこう。

## 5 インドネシア大学スプリングスクール

### 5.1 実施体制

インドネシア大学 (University of Indonesia [UI])

実施責任者

Sri Handayani Yasa

Indonesian Language Program (BIPA) Manager,  
LBI, Faculty of Humanities

Tantriana Widyaningsih Elfrida

Marketing Manager, LBI, Faculty of Humanities

担当教員

Fachril Subhandian

Lecturer, Faculty of Humanities

京都大学

実施責任者

落合 恵美子

大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット長・教授

安里 和晃

大学院文学研究科／アジア研究教育ユニット・准教授

担当教職員

河合 淳子

国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター・教授

西島 薫

学際融合教育研究推進センター・特定助教

## 5.2 募集要項とポスター

**多文化共学短期〔派遣〕留学プログラム**  
**2020年インドネシア大学スプリングスクールのご案内**  
Spring Intensive Course for Indonesian Language and Culture 2020

**申込締切:2019年11月11日(月)正午**

### 【日程】

- ・2020年2月16日(日) インドネシア、デポック市到着
- 2月17日(月)～2月28(金) 講義及び研修(於インドネシア大学)
- 2月29日(土) 出発まで自由行動、現地出発(あるいは翌朝に出発)
- 3月1日(日) 日本帰国

### 【プログラム概要】

本プログラムは、インドネシアで最も古くに設立された伝統ある高等教育機関のインドネシア大学において、インドネシア語学および文化についての講義、インドネシア文化体験、インドネシア語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供します。インドネシアの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流の場が得られます。

### 【募集詳細】

- ・募集人数: 10名程度
- ・募集対象: 京都大学に在籍する正規の学部生および正規の大学院生  
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・  
アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先します)
- ・応募条件: 異文化体験・異文化学習について高い意識を持つ者
- ・宿泊先: キャンパス内宿泊施設2名1室利用(予定)

### 【費用詳細】

・研修費用: 110,000 円程度

※上記は、京都大学重点戦略アクションプラン補助金、アジア研究教育ユニット(KUASU)補助金を差し引いた金額となります。

(上記費用に含まれるもの)

航空運賃、空港送迎費用、研修費用、宿泊費用、燃油サーチャージ、空港施設使用料、空港諸税、査証(B211A)取得費用

(上記費用に含まれないもの)

交通費、超過手荷物運搬料金、海外旅行保険、食事費用、個人的な諸費用

**【奨学金】**

・JASSO 奨学金(協定派遣): 70,000 円 (若干名)

※JASSO の支給要件を満たす者(日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、成績・所得の基準を満たす者等)に限ります。

**【申込み】**

申請手順: 1. オンライン申請を行ってください。(【別紙】オンライン申請の手順を参照)

オンライン申請は以下の<URL>より行ってください。

<https://area34.smp.ne.jp/area/p/nita0mjmel1pepbt9/hbbQ7J/login.html>

※ログイン ID 及びログインパスワードは国際教育交流課に取りに来てください。

2. 以下の書類 a-h をそろえ、下記の申請書類提出先に提出してください。

- a. オンライン申請書を印刷し、自署したもの
- b. 応募申請書(書式 1-1)
- c. 語学力証明書(語学試験(英語)のスコアコピー)

※スピーキング能力の証明がない場合は、面接時に能力を判断します。

- d. 成績証明書
- e. 志望動機(書式自由、所属・学年・氏名を明記のこと、A4 一枚程度)
- f. 海外留学誓約書

g. パスポート(入国時に有効期限6か月以上のもの)の顔写真ページのコピー

(未取得者はその旨申し出、早急に取得) カラー・A4 サイズ

h. 提出物チェックリスト

**(注) JASSO 奨学金 (協定派遣) を希望する方へ**

本奨学金を希望する方は別紙「JASSO 海外留学支援制度 奨学金申請について」をよく読んで上記提出書類【b 応募申請書 (書式 1-1)】の p. 3 「 JASSO 奨学金を希望します」の枠にチェックを入れてください。

申請についての詳細は、最終結果通知後にメールにてお知らせします。

募集要項確認、各種書類は下記 URL からダウンロードを行ってください。

<アジア研究教育ユニット(KUASU)> <http://www.kuasucpier.kyoto-u.ac.jp/>

<KULASIS> <https://www.k.kyoto-u.ac.jp/student/>

全学生向け共通掲示板→【留学情報はこちらを Click】

申請書類提出先: 教育推進・学生支援部 国際教育交流課海外留学掛 075-753-2488

(吉田本部構内 教育推進・学生支援部棟 1 階 国際教育交流課)

**【選考】:** 一次審査 書類審査

二次審査 面接

**【募集・選考スケジュール】**

**・申込締め切り: 2019 年 11 月 11 日(月)正午**

・面接: 2019 年 11 月 14 日 (木) 12:10-12:50 於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室6,  
18:15-19:00 於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室3,

2019 年 11 月 15 日 (金) 12:10-12:50 於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室6,  
18:15-19:00 於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室3,

※上記日程のうち、一人 10~15 分程度。

・最終結果通知: 2019 年 11 月 18 日(月)

・オリエンテーション: 2019 年 11 月 29 日(金) 12:10~12:50

於 吉田南構内 吉田国際交流会館 講義室6(出席必須)

- ・海外渡航安全説明会：2019年12月に開催予定。※決まり次第通知します。
- ・入学許可証、社会文化ビザ(B211A)取得のための必要書類提出：12月下旬から1月上旬  
※必要書類の詳細は派遣決定後に通達。在日本インドネシア大使館のHPを参照
- ・インドネシア語会話教室および発表準備演習：2020年2月中旬予定(出席必須)

#### 【備考】

- ・本プログラムは同時期に実施される他プログラムとの併願を認めていません。
- ・本プログラムは、国際高等教育院提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」  
(前期：金曜3限あるいは後期：金曜3限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・自然災害等その他事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・海外旅行保険については、大学指定の保険プランにご加入いただきます。
- ・本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「インドネシア研修」  
(アジア研究)の単位に充当されることがあります。
- ・本プログラムに引率者は付きません。
- ・本プログラムは以下の機関・事業により一人当たり計8.5万円相当の補助を受けて行われています。
  - (1) 京都大学アジア研究教育ユニットによる支援
  - (2) 京都大学重点戦略アクションプランによる支援
- ・渡航前に開催される2週間の会話教室への参加80%が求められます。
- ・本プログラムは、「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成」から京都大学アジア研究教育ユニット、京都大学重点戦略アクションプランによって引き継がれた支援体制のもとで行われます。

## 多文化共学短期〔派遣〕留学プログラム(2019年度)

# 2020年インドネシア大学スプリングスクール

Spring Intensive Course for Indonesian Language and Culture 2020

【補助金・奨学金付】

説明会：2019年10月24日（木）12:10～12:50 @吉田国際交流会館 講義室6（吉田南構内）

### 【日程】

出発日：2020年2月16日（日）

帰国日：2020年3月1日（日）（2週間）



### 【プログラム概要】

インドネシアで最も古くに設立された伝統あるインドネシア大学において、インドネシア語学および文化についての講義、インドネシア文化体験、インドネシア語母語話者との日本語も交えた交流と発表討論、実地研修等の機会を提供します。インドネシアの言語、文化、社会、歴史等について知識を深めるとともに、高度な異文化理解・交流の場が得られます。

### 【詳細】

- ・ 募集人数：10名程度
- ・ 研修内容：インドネシア言語文化講義、学生交流、実地研修、発表討論
- ・ 募集対象：京都大学に在籍する正規の学部生および正規の大学院生  
(大学院生は、文学研究科・教育学研究科・経済学研究科・農学研究科・アジア・アフリカ地域研究研究科・経営管理大学院に所属する者を優先します。)

・ 費用：110,000円程度

※上記は、京都大学重点戦略アクションプラン補助金、アジア研究教育ユニット（KUASU）補助金を差し引いた金額となります。

※最終決定通知後に参加を取りやめる場合、キャンセル料が発生します。

(上記費用に含まれるもの)

航空運賃、空港送迎費用、研修費用、宿泊費用、燃油サーチャージ、空港施設使用料、空港諸税、査証申請費

(上記費用に含まれないもの)

交通費、超過手荷物運搬料金、海外旅行保険、食事費用、個人的な諸費用

海外旅行保険：大学指定の保険プランへの加入が必須

・ 奨学金：JASSO奨学金(協定派遣)；70,000円（若干名）

※JASSOの支給要件を満たす者（日本国籍を有するか日本永住が許可されている者、成績・所得の基準を満たす者等）に限ります。

### 【申込方法】

・ 申込み：下記HPで募集要項を確認し、オンライン申請をおこない、必要書類をそろえて提出してください。<アジア研究教育ユニット> <http://www.kuasucp.cpiet.kyoto-u.ac.jp/>

・ 提出先：教育推進・学生支援部棟1階 国際教育交流課 海外留学掛 075-753-2488

【締切日】 **2019年11月11日（月）12時00分（正午）**

【本件照会先】 国際高等教育院 河合 淳子 [ryuga-east.asia@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:ryuga-east.asia@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)  
学際融合教育研究推進センター 西島 薫 (短期留学プログラム東アジア代表アドレス)

### 【備考】

- ・ 同時期に実施される他プログラムとの併願を認めません。
- ・ 国際高等教育院提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」(2019年度前期：金曜3限あるいは2019年度後期：金曜3限)を受講した上での参加を推奨しています。
- ・ 自然災害等その他の事由により、プログラムが中止になることがあります。
- ・ 本プログラムの受講は、文学研究科・文学部提供の多言語多文化科目「インドネシア研修」(アジア研究)の単位に充当されることがあります。
- ・ 本プログラムに引率者は付きません。
- ・ 本プログラムは、「「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成」から京都大学アジア研究教育ユニット、京都大学重点戦略アクションプランによって引き継がれた支援体制のもとで行われます。



### 5.3 研修日程

#### Universitas Indonesia Spring School 2020

16FEB - 1 MAR 2019

Date	Time	Activity	Lecturer/Staff	Place
Sun, 16 FEB	11:00	Departure (SQ619-SQ966)		Kansai International Airport
	19:25	Arrival		Soekarno-Hatta International Airport
	20:00-22:00	Pick-up, Airport - Guest House		Soekarno-Hatta International Airport
		Check-in	Meidy Kautsar (BIPA)	Wisma Makara UI
Mon, 17 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
		Daily necessities for students	Buddies(FIB)	Margo City Depok
Tue, 18 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5016)
		Menari	—	—
Wed, 19 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
Thu, 20 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung VI (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung VI (room 5106)
Fri, 21 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	14:00-16:00	Membatik	BIPA	
Sat, 22 FEB	9:00-18:00	Study Tour to Taman Mini Indonesia Indah	BIPA & Student Tutors	Taman Mini Indonesia Indah (Jakarta)
Sun, 23 FEB		Free Time		
Mon, 24 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	14:00-16:00	Gamelan	BIPA	—
Tue, 25 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	16:00-18:00	Terjemahan JP-ID	Fachril Subhandiuan (FIB)	—
Wed, 26 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	16:00-18:00	Presentation Preparation	FIB	Gedung V (room 5106)
Thu, 27 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	16:00-18:00	Presentation Preparation	FIB	Gedung V (room 5106)
Fri, 28 FEB	9:00-10:40	Basic Indonesian Language Class	BIPA	Gedung V (room 5106)
	11:00-12:40	Basic Indonesian Language Class	Raissa Rizkia (BIPA)	Gedung V (room 5106)
	13:00-14:45	Lunch	BIPA	Gubug Makan Mang Engking
	15:15-18:00	Joint Presentation	Fachril Subhandiuan (FIB)	Gedung IV (Auditorium, 4101)
Sat, 29 MAR	12:00	Check-out	Kaoru Nishijima (KU)	Wisma Makara UI
	16:00	Pick-up, Guest House – Airport	Kaoru Nishijima (KU)	Wisma Makara UI
	22:20	Departure (SQ967-SQ618)	BIPA	
Sun, 1 MAR	8:45	Arrival	Kaoru Nishijima (KU)	Kansai International Airport

### 5.4 参加学生一覧

班 長	氏 名	NAME	所 属	学 年
-----	-----	------	-----	-----



	漆原 基志	URUSHIBARA MOTOSHI	総合人間学部	B2
	大橋 明日香	OHASHI ASUKA	文学部	B1
	梶田 美晴	KAJITA MIHARU	文学部	B1
	近藤 悠人	ITO SHUNSUKE	工学部	B1
	柴田 優里香	SHIBATA YURIKA	農学部	B1
	千種 杏奈	CHIKUSA ANNA	文学部	B4
◎	中村 陸人	NAKAMURA RIKUTO	理学部	B4
○	中山 ひとみ	NAKAYAMA HITOMI	農学部	B3
	長谷部 依央	HASEBE IO	薬学部	B2
	堀口 祐大	HORIGUCHI YUDAI	工学部	B2

## 5.5 インドネシア語会話教室

### インドネシア語教室レポート

久納源太

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士2年

本報告書では、多文化共学短期[派遣]留学プログラム「2020年インドネシア大学スプリングスクール渡航前授業」に参加する京大生向けのインドネシア語教室について報告する。2020年2月5日から2月14日までの間、京都大学吉田南4号館と吉田国際交流会館にて、インドネシア語教室を実施した。本インドネシア語教室は、インドネシア語の基礎知識及びインドネシア共和国の概要を理解することを目的とした。また、インドネシア語に関しては、現地で過ごすのに必要最低限な会話能力と初級レベルの基本文法を中心に授業を行った。具体的な内容は以下のとおりである。

第一回：2月5日（2限・3限）

1. インドネシア語での自己紹介
  - 1.1 基礎的な文の形・インドネシア語の特徴
  - 1.2 名詞の生成
  - 1.3 名詞文
2. インドネシア語のアルファベット読み
3. 基語動詞

第二回：2月7日（3限・4限）

1. 前置詞
2. 数字
3. 会話練習
4. 発音練習

第三回：2月10日（3限・4限）

4. 意思表示
  - (ア) 命令文
  - (イ) お願い
  - (ウ) 要望・希望
2. 接続詞
3. 会話練習（自分の学部・学科を説明する）。

第四回：2月12日（3限・4限）

1. 書き言葉と話し言葉
2. 疑問文（道を聞く）
3. 時間の表現方法
4. インドネシア社会について

第五回：2月14日（4限・5限）

1. 応用会話練習（お店で食べ物を頼む）
  - a. 比較文
  - b. 日常会話で便利な表現
5. インドネシアの紹介
  - (ア) ジャカルタの紹介
  - (イ) インドネシアの自然・文化資源に関するビデオ鑑賞

今回のインドネシア語教室では、留学先での語学研修の事前準備としての本教室の役割を考慮して、基礎的な文法知識を教えた後に、シチュエーションに応じた会話と成文練習を繰り返す方法をとった。

文法に関しては、日本語や英語に照らし合わせながら授業を行い、学生たちも理解しやすいものだったと考えられる。会話と成文練習に関しては、毎授業、対話式の課題を学生に課し、語彙、発音、成分能力、インドネシア語的ニュアンスの理解の向上に励んだ。

また、インドネシア社会の基礎知識も説明も行った。これは、同国の多種多様な民族、言語、宗教といった文化的特徴から始まり、渡航先となるジャカルタ州での日常生活に関する内容を含む。学生らは積極的に授業に参加し、わからないことを質問した。質問は、言語よりもインドネシアの社会に関する質問が目立った。最終授業にて、学生らはインドネシア語での大まかな自己紹介と意思表示をこなし、比較的の本教室の目的を達成出来たと考えられる。

教材は「教科書：インドネシア語（森山・柏村著）」と「一冊目のインドネシア語（小笠原・クマラニングルム著）」を使用した。

## 5.6 共同発表

日時： 2020年2月28日（金）16:00-19:00  
場所： インドネシア大学人文科学部 第4棟講義室  
担当教員： Fachril Subhandian（インドネシア大学人文科学部・講師）  
西島薫（京都大学学際融合教育研究推進センター・特定助教）  
司会進行： Fachril Subhandian

### 1. 「PEDAS は何か？日本とインドネシアの PEDAS の比較」

発表者：長谷部伊央（京都大薬学部2年）  
梶田美晴（京都大学文学部1年）  
近藤悠人（京都大学文学部4年）  
Elvista Chandew（インドネシア大学人文科学部3年）  
Rafid Pratama（インドネシア大学人文学部3年）

### 2. 「首都移転」

発表者：千種杏奈（京都大学文学部4年）  
大橋明日香（京都大学文学部1年）  
堀口祐大（京都大学工学部2年）  
Ade Fathillah（インドネシア大学人文科学部3年）  
Nory Fitria Irwan（インドネシア大学人文科学部3年）

### 3. 「インドネシアと日本の植物」

発表者：中村陸人（京都大学理学部4年）  
柴田優里香（京都大学文学部1年）  
Almadiva Raissa P. P.（インドネシア大学人文科学部3年）  
Yarra Rania Nuru I.（インドネシア大学人文科学部3年）

### 4. 「ジェンダー平等」

発表者：中山ひとみ（京都大学農学部3年）  
漆原基志（京都大学総合人間学部2年）  
Carmelita Christie（インドネシア大学人文科学部3年）  
Fiqih Rusdy Zulkarnain（インドネシア大学人文科学部3年）  
Leonard（インドネシア大学人文科学部3年）

## 5.7 担当教員所感

### 2020年インドネシア大学スプリングスクール

ヒマワン・プラタマ

インドネシア大学人文科学部日本学科・講師

世界各国の友好関係は、文化交流の実施と、相互理解のための努力の成果です。従って、日本とインドネシアの持続的な友好関係を保つためにも、両国の若者を交流させる機会が必要不可欠でしょう。そういう意味では、2週間（2019年2月17日から3月2日）という限られた時間にもかかわらず、本年度も京都大学とインドネシア大学の学生（UI生）に共同勉強という非常に貴重な文化交流のチャンスを与えていただいた京都スプリングスクールを実施して頂いた京都大学の皆様に、心よりお礼を申し上げます。私自身は、京都スプリングスクールの実施によって、毎年いかに学生にとってこのような素晴らしいプログラムが大変有意義な異文化交流の機会になるかを気づかせていただきました。



本年度のプログラムは、基本的に昨年度のプログラム内容に基づいて計画され、インドネシア語・インドネシア文化紹介の授業と、インドネシア大学人文科学部日本学科の学生との共同勉強・発表に分けられました。今回の参加者は16名（京大生8名、UI生8名）で、共同勉強・発表の際、参加者が京大生2名とUI生2名という4人グループに分けられました。共同勉強・発表の大きなテーマを「日本とインドネシアの文化比較」として、それぞれのグループから発表のテーマを決めていただきました。本年度もまた学生の選んだ発表テーマに驚きを感じました。それぞれのグループは次のテーマを選びました。「日本とインドネシアの女性の幽霊の解釈」、「日本とインドネシアの屋台」、「結婚に対する考え方と結婚式の違い」、「日本とインドネシアのデート文化の違い」。共同勉強・発表を通して、両大学の学生は自分の文化を紹介する機会をもらい、それから日本或いはインドネシアという他国の文化との共通点或いは相違点を学ぶことが出来ました。そして、それらの共通点と相違点を理解した上、自分たちが今後の両国の更なる友好関係にどのような貢献が出来るのかについて考える機会を得たでしょう。

# Universitas Indonesia Spring School 2018

Himawan Pratama

Pengajar Program Studi Jepang,  
Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya, Universitas Indonesia

Persahabatan antarbangsa merupakan buah dari interaksi budaya dan semangat untuk saling memahami. Oleh karenanya, dalam usaha menjamin hubungan harmonis di antara Indonesia dan Jepang, penyediaan kesempatan bagi generasi muda kedua negara untuk saling berinteraksi dan mempelajari budaya masing-masing merupakan sebuah hal yang krusial. Saya sangat bersyukur terhadap keberadaan Kyoto Spring School, karena meski dalam waktu yang relatif terbatas, program ini menyediakan kesempatan yang sangat intens bagi mahasiswa Universitas Indonesia dan Kyoto University untuk saling berkenalan, memperkenalkan budaya dan cara pandang masing-masing, dan kemudian menyadari berbagai persamaan maupun perbedaan yang terdapat di antara diri mereka dengan teman-teman yang berbeda bangsa. Melalui penyelenggaraan Kyoto Spring School, saya setiap tahun selalu diingatkan mengenai arti penting penyediaan kesempatan bagi mahasiswa untuk menjalin persahabatan antarbangsa. Untuk itu, saya kembali berterima kasih kepada seluruh pihak dari Kyoto University yang telah memungkinkan Kyoto Spring School kembali terselenggara pada tahun 2019. Terima kasih atas kerjasama dan persahabatan yang diberikan sejak masa perencanaan, selama program berlangsung dari tanggal 17 Februari hingga 2 Maret 2019, dan setelah program berakhir.

Pada program kali ini kami sangat berbahagia dapat menyambut kedelapan mahasiswa Kyoto University. Konten program pada tahun 2019 didesain dengan berpatokan pada penyelenggaraan pada tahun sebelumnya, yaitu terdiri dari dua elemen utama: kelas bahasa Indonesia, dan kegiatan belajar bersama dengan mahasiswa Program Studi Jepang Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya. Sama seperti sebelumnya, kegiatan belajar bersama ditutup dengan acara presentasi kelompok. Terdapat empat kelompok yang melakukan presentasi, dengan masing-masing kelompok terdiri atas empat orang, yaitu dua orang mahasiswa Kyoto University, dan dua orang dari Universitas Indonesia. Untuk kegiatan belajar bersama, kami meminta mahasiswa untuk membuat presentasi tentang studi banding terhadap salah satu elemen dalam budaya Jepang dan Indonesia. Dan, seperti biasanya kami selalu dikejutkan dengan kreativitas dan kejelian para mahasiswa dalam memilih tema presentasi. Tema yang dipilih sangat bervariasi, dari perbandingan cerita hantu di Indonesia dan Jepang, perbedaan tata cara pernikahan, perbandingan makanan kaki lima kedua negara, hingga komparasi kecenderungan generasi muda Indonesia dan Jepang dalam menjalankan hubungan percintaan. Melalui presentasi-presentation tersebut kami mempelajari banyak hal mengenai berbagai perbedaan dan persamaan di antara Indonesia dan Jepang, serta bagaimana pemahaman terhadap keberadaan persamaan dan perbedaan tersebut dapat memperkuat hubungan harmonis kedua negara.

## 5.8 参加学生報告

### 「2020年インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

総合人間学部2回生

漆原 基志

これは、私の初めての飛行機搭乗経験、初めての海外渡航経験の報告である。本事業の期間は二週間と、海外初心者にはいささか長めである。しかし私は、これまでの内向的な自分を変える契機にしたいと考え、参加を決断した。海外渡航経験豊富な他の参加者とは少し違った報告書になるかもしれないが、来年度以降、この事業に参加しようか迷っている方の背中を押すことになるとも考え、ありのままを書こうと思う。

さて当然のことであるが、日本国内にいる限り、日本人は圧倒的な多数派である。よって、国内の外国人に対して、我々は『少数派で異質なモノ』という視線を向けてしまいがちである。しかしこれは、日本でしか通用しない論理であり、『日本人とそれ以外（外国人）』という図式も、所詮、数の問題でしかない。出発当日、空港に近づくにつれ、外国籍の人が少しずつ増える。圧倒的多数派の土台が崩れていく中で、私は得体の知れない不安に襲われた。荷物を預け、ゲートをくぐり、搭乗し、いよいよ国籍もわからない人々に囲まれ席に着いた時、私はこれまでにないほど『個』を意識した。『周りがどうかじゃねえ。お前は、何がしたいんだ』。多くの背中が無言で語りかけてくるようで、私は、この感覚を得られただけでも大きな収穫であった。

現地に着いてからは、初海外でよくあるトラブルを一通り経験した。頭痛、腹痛、体調不良、現金不足、ホテルのカードキー紛失、携帯電話の通信契約の失敗など、多くのことに困らされ、苦労した。周囲の仲間たちに助けられ、なんとか二週間を生き抜くことができたが、あらゆる地雷を踏み、ここまでボコボコにされると、もうどうにでもなれという気分になる。私の中で海外渡航のハードルは大きく下がり、スマホ、パスポート、現金、漢方薬さえあれば生きていけると、度胸がついた。

現地での学習、生活について記す。基本的に午前中はインドネシア語の講習であった。語学に苦手意識がある私はかなりてこずり、最後まで悩まされた。周囲のサポートがなければ、私は何も分からずに座っていただけの時間になっていたと思う。また午後は、バティック、ガムランといった伝統文化の体験や、ジャカルタ市内の観光に時間を費やした。午前中に習得した稚拙なインドネシア語を実際に試しては、語学力不足を実感していた。

インドネシアでの日本の存在感は、予想以上のものがある。日本における英語のように、インドネシアで日本語は『よく分からないがカッコいい』とみなされている一面があるようで、ファッションの一部としてカタカナがプリントされた T シャツが売られていた。また、ショッピングモールのフードコートでは、サンバルなどで独自の味付けをされた日本食が提供され、行列ができていた。

またこの例に限らず、インドネシアの食文化は独特であった。インドネシアのマクドナルドではフライドチキンが売られていると知った時は、驚いた。しかも横には KFC があり、そちらではナシ（白米）とフライドチキンのセットメニューが大人気だというのである。現

地の屋台では揚げ物とナシがよく売られているが、その影響が色濃く表れていると感じた。文化の輸出、輸入、発展の一端である。

このような充実した二週間の活動では、インドネシア大学日本語学科の方々に、あらゆる面で非常にお世話になった。自分たちの授業も忙しい中、インドネシアに慣れない我々の面倒をつきっきりで見て頂き、深く、深く感謝している。彼らは私の慣れないインドネシア語にも耳を傾け、親切に対応してくれた。英語、日本語、インドネシア語がごちゃ混ぜの雑談の中でも、なんとか興味のある話題や共通項を見つけ、丁寧に発展させれば、誰とでも仲良くなれる。よく知りもせず距離を取ってしまうのは、もったいないことなのだと実感した。また、彼らはフレンドリーである一方、向学心も旺盛である。名門大学の日本語学科なので、日本への造詣が極めて深い。プレゼン中や講義中でも、我々が日常の一部として意識もしない日本社会の一側面に目をつけ、積極的に話し合い、流暢な日本語で鋭い質問を投げかけてくる。ひょっとして私は、日本についての知識、勉学への意欲、双方で大きく水をあけられているのではないかと、内省を促された。これも、インドネシアで得た貴重な経験、気づきの一つである。

さて、最後にお伝えしたいことがある。本報告書はネットで公開されるようである。これを読んでいる方がもし、海外が不安で、参加するか迷っている方ならば、是非、エントリーしてみたい。私自身、昨年参加した友人に強引に参加を促され、本事業に参加した。そして、そんないい加減な人間でもなんとかかなり、結果的に、忘れられない経験と、新たな交友関係を得た。世の中、やってみなければ分からないことが多くあると実感している。萎縮せず、果敢に海外へチャレンジして頂きたい。

### 「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

文学部1回生

大橋明日香

今回の研修で経験したことや感じたこと（のごく一部）をいくつかの項目に分けて記述していく。

まずはインドネシアでの生活について。日本とは違う点も多く驚かされることもあった。例えば想像以上にトイレの紙がない。紙を流す文化もない。桶から水を汲んで流すタイプのトイレにも遭遇した。知っていても慣れるのは意外と大変である。道を歩く際には、なかなかニオイのドブや舗装がガタガタな歩道も多いので、そういう場所に慣れていない人は覚悟の方がいい。そしてバイクがかなり多い。轢かれることはまずないと思うが、信号や横断歩道が少ないため日本のように安全に歩けるとは思っていないだろう。

言葉の壁も案外大きかった。大学周辺では英語が通じる場所も多いが、少し離れると郊外のローカルな場所という感じなのでほとんど英語が通じなくなる。習ったインドネシア語を使う機会があるという考え方もあると同時に、自分は他の国に行ったことがあったからそれ



ほど困らなかったものの、初めての海外留学先としてはもっと英語が通じたり周辺環境が良かったりする場所の方が良いのではないかと思った。

二つ目はプログラムの内容について。結構がつりインドネシア語を学ぶプログラムになっていた。このプログラムのための専用テキストもあったし、平日の午前中はひたすらインドネシア語の授業だった。そのおかげで物を買うときに値段を聞いて支払う、大きなショッピングモールで入り口が見つからなかったときに入り口がどこか尋ねる、乗った電車が行きたいところに行くのかどうか聞くなどができるようになり、2週間という短い期間であっても実際に使えるインドネシア語がある程度身についたと感じた。

インドネシア大学の日本学科の学生とは、みんなで昼食をとったり大学とその周辺や観光地を案内してもらったり合同でプレゼン発表をしたりして仲良くなることができた。彼らからインドネシアのことを学び、私たちが彼らに日本のことを多少は教えることもできた（と思いたい）。日本学科の学生はみんな日本語が上手なうえに親切で、とても温かく受け入れてもらったので、恩返しという意味でも京都での受け入れプログラムにぜひ参加したいと思うようになった。

そしてプログラム全体を通して感じたことについて。タイのプログラムに参加したときにも思ったが、やはり個人で旅行するのと勉強しに行くのとでは見えるものが違う気がする。現地の人々（特に私たちと同世代の学生たち）と交流することによって彼らがどのような考えを持ちどのように生活しているかを知ること、「郷に入っては郷に従え」という言葉のように現地の感覚で暮らしてみること、現地で現地の言葉を学ぶこと… これらのことはただの旅行ではなかなか経験できないことである。今回の派遣を通して、国際理解において現地の人々と交流することや実際にいろいろな経験をするのがいかに重要であるかを改めて感じた。今後もインドネシアに限らず色々な場所でさまざまな経験を積みたいと思った。

最後になりますが、このプログラムに関わったすべての人々に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

## 「2020年インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

文学部1年生

梶田美晴

本プログラムに参加して感じたのは、自分と違う経験をしてきた人と話すことがいかに大事で、貴重な体験かということである。また、2週間とはいえ慣れない土地で生活することで、自分の日常を振り返るきっかけともなった。

インドネシアで感じたのは、寛容さである。例えば、すぐ座ること。大学構内だけではなく、一大観光地であるモナスでもたくさんの人が地面に座り一休みをしているのを見て、驚いた。日本で道端に座ることはまずないので、その辺に座って一休みすることは新鮮で、また地元の人になった気分が楽しかった。特に街中で感じたのが、見知らぬ人ともすぐ打ち解け、また何かあれば注意してくれること。日本では知らない人が携帯を落としそうになって

いても、実際に注意する人はなかなかいないと思う。だから、インドネシアで、「携帯落ちそうになってるよ！」と指摘されたときはまず自分に話しかけられていたことにびっくりし、次にそれを教えてくれたことにびっくりした。また、電車が何かの不具合でなかなか進まなかったとき、前にいた若い女性と年配の女性が当たり前のようにお喋りしているのを見て、明らかに知り合いではなかったのにすごいなあと思った。このほかにも多くの日常の中のちょっとした場面で、いい意味で人の視線を気にしすぎない寛容さを感じた。

また、宗教についての寛容さも感じた。私は日本に暮らしていて、宗教を意識することがほとんどないこともあり、宗教=教えに厳しいものというイメージを勝手に抱いていた。しかし、実際インドネシア大学(UI)の学生のみなどと話し、宗教に対する姿勢は人それぞれだし、またお互いに、「それぞれ」の部分についてどうこう言うことはないのだと気づかされた。もちろん触れにくい話題だからというのものもあるが、私にとってはすごく意外だった。

こうした日本との違い、日本では感じられないことを感じられただけでも、インドネシアに行ってよかったと思う。また、そうしたことを感じる中で、何も考えずに普通に過ごしている日常も、他の人からすれば普通ではないかもしれないから、自分の生活基準でしか物事を考えられないにせよ、それを常識のように思いこんで話すのは大きな間違いであると感じた。自分と違う環境で育ってきた人と話すときに、このことに留意することで、相手の尊重につなげることができると思う。

また、UIの友達から受けた、日本語についての質問がどれも難しく、日本語を面白いと思った。それこそ普段は意識せずに話しているからあまり気づかないけれど、ひらがな一文字で全体のニュアンスを変えることができるのは、本当に難しいと同時に面白いと思う。日本語についてもう少し知りたいなと思ったし、もう少し知っていたらもっと歯切れのよい解答ができたかもしれないとも思った。

インドネシアに行くことで、実際に行ってみないとわからないようなちょっとした違いが分かったし、その違いを知ることで自分の生活を振り返り、また普段の言動を見直す良い機会となった。また、日本の特性とまではいかないまでも、インドネシアと比較しての違いが分かった。今後、別の国に行ったとき、違う比較軸を見つけられたらと思う。

### 「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

文学部4年

近藤悠人

今回の派遣では、インドネシア大学 Universitas Indonesia (以下、UI) において言語学習と文化体験、日本語学科の学生との交流の機会を得た。午前の講義では、インドネシア語 Bahasa Indonesia を学んだ。インドネシア語は声調がなく発音も比較的容易で、ラテン文字を利用し、格変化や時制による語形変化がない言語である。また語順はSV0であり、後置修飾する点に留意しながら単語を置くことで意図が伝わるため、馴染みやすい言語だと感じた。片言ながら日常生活で挑戦し、現地の方を戸惑わせながらも意思疎通を図ることができた際

には、学習の醍醐味を味わうことができた。また歴史 sejarah はアラビア語に、タオル handuk はオランダ語に由来するなど、語彙が地域の歴史や文化の多層性を反映している点も興味深かった。友人や先生からは、出身地の言語が標準語と異なること、結婚相手の母語が異なることなども伺った。結果として、標準語の文法と語彙だけでなく、当地域の多様な言語環境への関心を深める機会になった。

午後からは舞踊や蠟付け染め、ガムランといったインドネシアの文化の体験や、日本語学科の学生との共同発表の準備に費やした。不器用ながら舞踊や音楽などに挑戦することで、独特の身体技法によって各民族の文化が脈々と受け継がれていることを学んだ。また日本語学科の授業見学の際には、日本語からインドネシア語への翻訳技法が取り上げられていた。その具体例として、谷崎潤一郎『蓼食う虫』やマイナーなライトノベルが紹介されるなど、学生の日本文学への幅広い関心や優秀さを垣間見ることになった。共同発表では、日本料理とインドネシア料理における辛さの違いを取り上げることになり、両文化の相違点について理解を深めることになった。

上記の活動以外の時間には、ジャカルタ Jakarta、デポック Depok、ボゴール Bogor といったジャカルタ大都市圏の各地を訪問することになった。その際、特に以下の4点について問題関心を深めた。

1点目は、日常生活、地域社会における宗教的影響力の強さと多様性である。街角にはモスクが立地し、商業施設・観光施設などにも musholla が設置されていた。また街中を歩く女性の多くがヒジャブを被り、決まった時間に礼拝している光景からは、イスラム教国としての印象を強めた。他方、インドネシア各地の環境保護運動を取り上げた映画『SEMESTA』を鑑賞した際には、イスラム教指導者のみならず、フローレス島の神父が登場し、共同体をまとめながら水力発電計画を実施する場面が見られた。イスラム教以外の宗教も許容され、かつそうした宗教勢力が地域の社会関係資本を維持する主体の一つであることを考えさせられた。

2点目は、ナショナリズムと国民国家形成である。うつくしいインドネシア・ミニ公園 Taman Mini Indonesia Indah では、インドネシア全土を縮小して再現した庭園や各州の建築物が展示されていた。国是である多様性の中の統一 Bhinneka Tunggal Ika を可視化し、統治主体と同じ俯瞰的視点で提示する意図を感じた。またジャカルタ中心部の国家記念塔 Monumen Nasional や独立宣言塔 Tugu Proklamasi、ボゴール闘争博物館 Museum Perjuangan Bogor を訪問した際には、それらの施設が独立前後の出来事の「記憶の場」であることを感じさせられた。インドネシア共和国 Republik Indonesia は、オランダ領東インドの領域を継承している。この恣意的に区画された領域内では、中華系からマレー系、パプア系まで多様な民族が分布している。この地域内で過去に起きた雑多な出来事を取捨選択し、「インドネシア共和国」に至る歴史／物語 Geschichte を紡ぎ出し、こうした「記憶の場」で（再）確認すること。それによって、多様な民族に属する人々が国民になる becoming 過程を経験し、国民国家が実現されていったのではないだろうかと思わされた。振り返ってみると、私たちの日本史も同じく物語であること、また近代初期以降、日本でも同様の過程が経られ

てきたことにも目を向ける機会になった。インドネシアを研究したベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を再読し、再度、国民国家形成やナショナリズムについて考えることにしたい。

3点目は、ライフヒストリーから浮き彫りになる歴史の記憶である。派遣中、折を見てさりげなく学生や友人へのライフヒストリーを聞き取った。その結果、オランダ植民地時代や日本占領時代、独立後の社会・経済・政治的出来事が彼らの人生に影響を与えていることを実感した。例えば、スマトラ島の Jambi 出身の友人からは、日本占領時代に曾祖父がロームシャであったこと、小学生であった祖父は毎日集会があったことや君が代を覚えていること、両親はトランスミグレーション政策によって移動した場所で出会ったことを伺った。ミクロレベルの語りを丹念に収集することで、何気ない記憶の背景に社会情勢の影が潜んでいることを実感させられた。社会科学を学ぶ上で、量的データに還元できない質的データも重視すべきことを再確認させられた機会だった。

最後になるが、ジャカルタ大都市圏における都市問題の深刻化も印象に残った。慢性的な交通渋滞や交通インフラ整備の不十分さ、インフォーマルセクターの割合の高さ、厳然たる経済格差の存在など負の側面に目を向ける機会が多かった。他方、モール Ma1 が発達し、住宅や耐久消費財への需要の高まりがみられるなど、今後数十年間で急速な成長を遂げる国であることも確信した。私は 2020 年 4 月から、社会インフラを担う会社に経理財務として働く予定である。今回の派遣を通じて、今後の数十年のキャリアの中で、インドネシアを含む成長著しい新興国でのインフラ事業を、財政面から支持する経験を積んでいきたいという思いを抱いた。

末筆にはなりますが、今回の派遣を支援して頂いた皆さんには大変お世話になりました。また 2 年半ぶりにも関わらず再会して頂いた I さん、I さん、R さんには多大な協力を頂きました。厚く感謝申し上げます。

### 「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

農学部 1 年  
柴田優里香

学んだこととして大きいのは日本では感じることの少なかった身体感覚である。渡航前にジャカルタの雨温図も写真も見たことがあって、宗教や文化についても少しは調べていたので、何となく知っているつもりでいた。しかし初日にスカルノ・ハッタ空港から宿泊先に向かう間、自分が何一つちゃんとは知らなかったことに気づかされた。五感を研ぎ澄ませて、現地にしかないヤシの木の大ささを感じ、その土地にしかない音を聞き、洪水直後のパサル・ミングの水たまりにスニーカーを突っ込み、冷たくて生温かいスクールに打たれ、屋台街の匂いの中を歩く。信号機があっても道を横断するときは手でおびたしい数の車やバイクに合図を送りながら渡る。頭で知識として理解してただけで、実感が伴わないものだったからではないかと感じる。身体の時間は頭脳のそれよりもはるかに遅いことを改めて確認

した。その後、自分が十分に調べたと思っていた『頭の中の知識』すらも全く十分ではなかったことを滞在期間中何度も痛感することになった。

プログラムでは主にインドネシア語を学んだのだが、語学を学ぶことそれ自体は目的ではなく、言葉を使って何ができるかこそが大切なのだと私はずっと考えてきた。『インドネシア語は習得の簡単な言語』といわれてそれを真に受けていたが、やはり言語である以上ある程度の単語と文法の習得は必須であり、第二外国語として履修していたフランス語よりややましというレベルまでしか到達しなかった。ちなみにジャカルタ近郊であっても英語が通じるとは限らない(日本人複数で行動していて誰の英語も通じなかった場合があった)ため、英語さえ学んでおけばいいという考えが誤りであることも痛感した。せめて日本で出来ることくらいは日本でしておくべきだった。

文化的なものとしては、朝 5 時のアザーン、食堂を含めて至る所で見かける猫とどこへ行っても見かけない犬、暑いのに決して半袖を着ない女性といった風景から、イスラム教が根付いていることを何度も実感した。一方でインドネシア大学の学生たちはイスラム教の制約から来る息苦しさをほとんど感じていないように見えた(見えた、だけかも知れない)。インドネシアはイスラム教国家としては戒律が緩い方らしく(クリスチャンや仏教徒もいるので)、ポケモンやアニメは普通に居るし、ヘジャブをかぶらないムスリマも居る。ブルカを着ていながらバスや電車に乗る際の高い段差をものともしない女性たちも見た。日曜日にイスティクラルモスク(メッカ、メディナに次ぐ世界 3 位の規模のモスク)に行ったとき、祈っている人がもちろん多かったが、輪になって喋っている人、寝ている人、走り回る子どもなど、いろいろな人が居た。宗教施設ということでもかなり構えていたけれども、そういうところも含めて日常の空間なのだと、なにか虚を突かれたように思う。また、環太平洋造山帯に属し、地震や洪水の危険が高いにもかかわらず、『地震が起きたときどうすべきか』といった教育はあまり受けていないとインドネシア大学の学生が話してくれた。日本との防災意識の違いが窺えたが、知識が全く足りずより深い考察をすることが出来なかったのは反省点として残る。

インドネシア大学の学生や一緒にプログラムに参加した京都大学の学生と、はじめの一週間で会話の糸口を見つけられず密なコミュニケーションがとれなかったことにも悔いが残る。そのような状況でも、7 日目の夜、インドネシア大学の学生と自殺について話したことは印象に残っている。『日本の電車でヤクザが手首を切って自殺したって聞いたけど、日本でそういうのはよくあることなの?』という話から始まり、『日本人はどうしてそんなにたくさんの方が自殺するの?』と聞かれたとき、とっさには答えられなかった。いくつかの仮説を思いついたものの、どれもはっきりした裏打ちはなかった。

今回の研修でわかったことは、少なくともジャカルタ周辺で 2 週間暮らしたくらいでは大きく体調を崩さないことだ。私事だが、これで海外への不安がだいぶ軽減された。また事前準備が足りず、知識が足りなかったため深い見方をすることが出来なかった。もしかしたらどれほど念入りに準備しても準備不足を感じるようになるのかもしれないが、最低限がなんなのかは少しつかめたと思う。将来はこんなことをしたい、という具体的なビジョンはまだ

ないし、そのことにコンプレックスを感じても居る。しかし今は出来ることをやるしかない。今出来ること、とは、やりたいことが生まれたときに『経験不足』などという理由で断念しなければいけない確率を下げることだと考えている。

## 「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

文学部 4年

千種杏奈

私がインドネシア大学のスプリングスクールに参加した理由は、イスラム教に興味があったからです。私は昨年、タイのチュラーロンコン大学のサマースクールに参加し、その際に無宗教だと思っていた自身の宗教観や価値観を見つめ直す経験を得ました。そこで私は、イスラム世界はどのような感覚や価値観を有しているのかを体感し、視野を広げたいという思いがありました。

今回の2週間のプログラムを通して、知りたかったイスラムについて学ぶことができたのはもちろん、インドネシアの人々の多様な生活や思考を学ぶことができました。現地で私が得た豊かな学びのうち、特に印象に残っている三点を振り返りたいと思います。

一点目は、イスラム教のお祈りについてです。イスラム教では一日に5回お祈りをしなくてはならないということは知識としてしか得ておらず、渡航前の自分には、厳しく大変そうというイメージしかありませんでした。しかし東南アジア最大のイスティクルモスクで、人々がお祈りをしている様子を見学させてもらった際に、お祈りは作法に則り自分と神だけの世界に入ること、内省がなされているのではないかと思いました。そして一日5回のお祈りは、その時の感情の起伏や迷いから、一度心を落ち着けて、神との対話を通して自分を見つめ直すことができる貴重な時間なのだ、と考えが変わりました。私も一日のうちで自分を静かに省みる機会があれば、より毎日を有意義に過ごせるのではと感じています。

二点目は日本との関係性についてです。インドネシアではよく GoJek という現地タクシーをよく使い、その運転手さんがたびたび話しかけてきて下さいました。授業で覚えたばかりのインドネシア語と少し英語を使い、3人ほどの運転手さんに日本のイメージを聞いてみると、みな回答が hard working や discipline であったことが印象的でした。またある方は、原爆から立ち直った日本を尊敬していると教えてくれました。

一方で、インドネシアの独立のシンボルであるモナスや、タマンミニの歴史展示では、日本の3年間の占領統治時代の強制労働の説明がなされており、これらの展示を見たとき、日本の過去の歴史に対する罪の意識を感じ、心が重くなりました。しかし私が話した街の人々は、友好的で日本に良いイメージを持っている人が多かったので、日本の占領の事実と責任は消えませんが、戦後多くの人々の努力によってインドネシアとの良い関係性が築かれているのかなと感じました。自分は4月から地方公務員として働くので、地方レベルでも日本とインドネシアとの関係性がより豊かなものになるよう尽力したいです。

三点目は言語学習についてです。プログラム中、授業はすべてインドネシア語で行われ、

慣れると楽しく習得できました。インドネシア語はアルファベットで読むことができ、文法が簡単で声調もないため、初心者でも話しやすく、自分が覚えたインドネシア語が街で通じるのはとても嬉しかったです。私は今までドイツ語を2年間、タイ語を半年勉強していましたが、インドネシア語が一番話せるようになったと思います。今回の渡航中、自分は他の言語を勉強してきたにもかかわらず、インドネシア語に比べてあまり身につけなかったことに反省を感じていました。しかし日本語学科の友達が趣味で作ったインドネシア語の冊子のあとがきに「最後まで読んでもインドネシア語が話せるようにはならなかったと思います。語学なんてそれでいいと思います。」との言葉があり、心が救われた気がしました。彼のその言葉から、インドネシア語をはじめとして自分が勉強してきた言語がいま分からなくても忘れてしまったとしても、今後また学び続けていきたいと思いました。

以上の三点が、今回のインドネシア渡航で私が学んだ印象的なこととなります。

最後になりましたが、今回のプログラムを支えてくださったインドネシア大学と京大の先生方、職員のみなさまには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。そして2週間インドネシア大学の日本語学科の友達と過ごした時間は、本当に楽しく素晴らしいものでした。今後も交流を続け、彼らが日本に来たときには必ず恩返しをしたいと思います。ありがとうございました。

#### 「2020年インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

理学部4年

中村陸人

私が今回のプログラムに参加したことで得た学習成果は2点ある。1点目は、現地の言葉を使って現地の文化を吸収する能力である。今までにベトナムへ行った経験があったが、その際は現地の人と英語で会話するか、あるいは現地の人に日本語で話しその内容をベトナム語に通訳してもらうことでコミュニケーションをとっていた。しかし、今回のプログラムではインドネシア大学で学んだ実践的なインドネシア語を活かし、現地の人とインドネシア語を使って直接会話をすることが出来た。インドネシア語を使って直接対話をする中で、相手の考えを直接理解することが出来たし、自分の考えをよりスムーズに相手に伝えることが出来た。結果、インドネシア文化について、言葉で表現しにくいところまで理解し、また日本の文化についてインドネシア語で表現することができ、学ぶことが多かった。2点目は、異文化の共存について理解を深めることが出来た。インドネシアに住む人々の人種は多様であり、宗教もイスラム教が主だがキリスト教、ヒンデュー教、仏教と様々である。また島ごとに独特の音楽や舞踊がある。このような多種多様な文化がお互いを排除することなく、共存しあっている点もインドネシアの特徴なのではないかと感じた。確かに日本も地域ごとにいろいろな文化が存在するが、インドネシアに比べると地域間の違いは小さいように感じる。インドネシアは日本に比べて人口や面積も広く、多くの文化がうまく共存していた。自分の文化や価値観のみでなく、相手の文化や価値観に対しても理解出来る能力は、今後ますます

グローバル化が進む中でより必要とされる能力であり、その能力の一部を今回のプログラムで得られたことは非常に有意義であった。

文化交流で、バティックのハンカチ制作、ガムランという楽器の演奏、ムナーリというインドネシア舞踊の体験を通じ、座学のみでなく実際に体を動かして、インドネシア文化に触れることが出来たのが今までには無かった有意義な体験であった。また、講義で日本語をインドネシア語に翻訳する際の方法論を学ばせていただいた。日本独自の文化や風習を、インドネシアの人々に理解できるようにどのように工夫すればよいのかについて学び日本文化について再度見直す機会になっただけでなく、インドネシアの文化に関してもより深い知識を得ることが出来た。

今回のプログラムはインドネシア語やインドネシア文化を2週間のインドネシア滞在で学習するプログラムである。講義のみでなく、実際の文化体験（バティックやガムラン等）を通じて、より実践的にインドネシア文化を吸収することが出来た。また現地の学生との交流を通じて、これからの日本とインドネシアを担う若者同士で交流でき、非常に有意義だった。

今回のプログラムを通じ、将来はアジアだけでなく世界で活躍できる人間になりたいと思うようになった。インドネシアで学んだ異文化理解能力を活かし、今までに自分が行ったことがある国だけでなく、これまでに訪れたことがない国の人々とも積極的に交流していきたい。

#### 「2020年インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

農学部3年

中山ひとみ

インドネシアは私にとって、環境経済学や森林経済学を学ぶようになった原点の国であり、並々ならぬ魅力を持つアジアのなかでもさらに特別な国であった。しかし一方で、私の今までの大学での3年間は、留学や国際交流には関心のない、思い返せばもったいない3年間だった。今回スプリングスクールで得たことは数多くあるが、特に語学を学ぶ意義とプレゼン発表での学びの二点に絞って報告したいと思う。

私にとって英語を学ぶ意義は文献を読むためという意味合いが強かったが、今回の留学を経て、英語はコミュニケーションの手段として必須であり、今後どのような進路を選択する上でも向上させていく必要があると強く感じた。具体的には、インドネシア大学日本学科の学生と私たちがディスカッションをする際に、日本語でもインドネシア語でも困難な場合は英語で話すのが便利だった。もちろん彼らの日本語は優れていて、私は何度も助けられた。では英語を身につけ、コミュニケーションが自在になったときに、さらにほかの言語を学ぶ意味はあるのだろうか。もちろんある。英語を話せない人とのコミュニケーションに有用であるだけでなく、町での人々の会話や何気ない声かけを、意味を持つ音として聞き取ることができたらどんなに楽しいだろう。人間の暮らしや人間そのものに興味がある私にとって、言葉はとてもおもしろく、なくてはならないものである。派遣留学の最初は早朝（pagi-



pagi) という単語を聞き取れただけで嬉しかったが、町で見ず知らずの人とも易しい会話をできるようになったときは胸が躍った。

次に、グループワークを通じた成長について触れたい。私たちのグループは京大生 2 名、UI 学生 3 名から構成されていた。テーマは、女性観や家族構成の歴史を議論していくうちにジェンダー平等について発表することに決まった。議論の過程では、彼らが自国の指針である「Bhinneka Tunggal Ika (多様性の中の統一)」についてどのように感じているか、異なる信仰を持つ学生間で宗教がどのように議論されているかなど、本題とは離れたことも時間をかけて話すことができた。ジェンダー平等の観点から、日本とインドネシアには相当の違いが存在する。その違いを統計と実体験に基づいて明らかにすると同時に、その違いが生じる原因を考えた。いつも授業の前後、放課後、食事や観光をともにしてくれていた UI 学生と、一步踏み込んだ議論ができたことは大きな収穫であった。歴史や時事に関する自分の知識不足を後悔した。自分たちの発表の 5 日前に UI 学生の翻訳についてのグループプレゼンを見学させてもらった。彼らはほとんど原稿を持たず、質問が出たらグループ内で一度意見交換をしてから返答していた。私は今まで発表に苦手意識があって原稿を読むような発表をしてしまう傾向があったが、今回 UI 学生をまねてその場で話してみることにした。与えられた課題について議論するのではなく、一切制約のないところから課題を発見し、文化的背景の異なる者同士で議論し発表するという過程は、簡単にできる経験ではない。

今回の経験は今後取り組んでいく卒業論文や大学院での研究の大きなモチベーションになり、またさらにインドネシアへの魅力が大きくなった。次はインドネシアの農村や森林、水産業を見に行ってみたい。またたくさんの人との素敵な出会いと発見が待ち受けていると思う。最後に、お世話になったすべての方々にも心より感謝申し上げます。

### 「インドネシアスプリングスクール派遣参加報告書」

薬学部 2 年  
長谷部依央

実は行きの飛行機(関空からシンガポールのトランジットの飛行機)で、隣のシンガポールの女性とひよんなことからとても仲良くなった。その時、少しばかり中国語が話せたことでより会話が弾み、シンガポールについて色々教えてもらった。国際理解というと大きく考えがちであるが、結局は人と人のつながりである、ということに気づかされた一場面であった。また、彼女は社会人であり、仕事の話をしてくれたが、自分も自分の研究などについてもっと話せたらよかったと感じた。

また、これまで滞在していた都市では現地の言葉がわからなくても特異な英語でカバーしていた面が大きかったが、インドネシアでは英語や日本語が話せるのは限られた人たちだけだった。食堂のお兄さんも街中のバイクタクシーも、また、授業もほぼすべてインドネシア語だけだったので、授業で習った基本単語や表現を駆使し、何とかコミュニケーションを図る

うとしたのは新しい経験だった。同じ授業を受けていてもどんどん使っている人ほどタクシー運転手ともどんどん会話ができるようになっており、言語力向上は実践あるのみだと感じた。

最後に、インドネシア大学の学生の中には power point の使い方が洗練されている学生が数人いた。今まで何となくで使っていた power point だが、彼らに聞いたスキルなどを練習して身に付けようと思った。

インドネシアに来て新鮮だったことは3点ある。

1 点目は、交通量の多さだ。急激に発展途上、都市への人口流入した結果、首都ジャカルタでは交通渋滞が深刻だ。また、バイクと車が主流なため、Uber の一種である、Gojek と Grab が発達している。現在地と行先を入力すると近くのドライバーとマッチングができ、その場で値段も表示される。とても効率的なシステムであり、この点では日本よりも進んでいるといえる。

2 点目は、時間間隔のずれだ。よく海外の国は時間にルーズというが、まさにその通りである。電車の到着時間も読めないことがしばしばある。現地で仲良くなった友達と待ち合わせしても、渋滞に引っかかったり、お祈りの時間になってしまったり、などと色々重なって 1 時間後にやっと合流できることが普通だ。

3 点目は、宗教に関する意識の差だ。インドネシアは無宗教が法律違反であり、国民はイスラム教、仏教、キリスト教、あるいはヒンドゥー教のいずれかを信仰しなければならない。この点に興味をもち、このプログラムに応募した。しかし、実際にこの点についてどう考えているかについて UI の学生に聞こうとすると、「それは sensitive な問題だ。」と言われ、あまり深く聞くことができなかった。さらに、モスクに観光に行った際、クリスチャンである UI の学生は「追い出されるかもしれない」と言って大変怖がり、始終インドネシア人であるとわからないように振舞っていたことから、多様な宗教を信仰する人々が同じ国の中でまとまるのは相当難しいことなのだと痛感した。

日本で 10 時間インドネシア語の授業を受けたのち、現地で授業を受けた(挨拶、場所の行き方、数字、買い物の仕方、自己紹介、職業などを学んだ)。また、午後に文化授業(batik、スマトラ島伝統踊り、ガムランの授業)にも参加し、週末や放課後にはタマン・ミニヤパサール、イステイラルモスクを訪れた。最終日にテスト(文法、読解、リスニング、会話)があり、UI の学生との合同発表(私たちの班は辛さから見るインドネシアと日本の違いについて発表した)もある。その他に UI 日本学科の翻訳の授業を見学した。

ルームメイトが、内定が決まっている先輩であったことや、現地で仲良くなった生徒が今年の 9 月に東京本社就職が決まっていたこともあり、今後の進路について考える機会が多くあった。大学院に進学するか、就職するか、という選択がまずあるが、実務経験のために就職してから大学院に進学するか、海外の大学院へ留学するかまだ検討している。どちらにせよ、大学院は進学したいという気持ちが強くなった。また、短期間の海外留学を重ねていくうちに、海外に行って実際に学ぶことは有形無形で多大であり、やはり大学院も海外で学びたいと思うようになった。

## 「インドネシア大学派遣参加報告書」

工学部建築学科 2年

堀口裕大

私がこのプログラムに参加した理由は、急速に発展するジャカルタの街を見たかったからと、インドネシア語に興味があったからである。

ジャカルタは大都会だと聞いていたが、実際のジャカルタは僕が想像している以上に都会だった。具体的には、高層ビルが広範囲に存在し、ジャカルタの市街地も非常に大きかった。まず最初に驚いたのは、空港が非常に綺麗だったことである。私は空港を見て、ジャカルタという街は想像以上に発展しているのではないかと期待した。このプログラムは午前中にインドネシア語の授業があり、午後は文化体験をしたり、UIの日本語学科の授業に参加したり、発表の準備をしたりする日と、半日自由行動の日があった。私は、午後がフリーの日はもちろん、文化体験後の時間や、発表準備までの空いた時間も利用して積極的にジャカルタへ足を運び、ジャカルタの高層ビル群や高級住宅街、日本人街、中華街などを散策した。移動中にタクシーや電車から街を眺めていると、高層ビル群が広範囲に多数存在していることに驚いた。また、一番驚いたのは大型ショッピングモールの数である。ジャカルタ市街地はもちろん、その郊外にも大型ショッピングモールがいくつもあり、賑わっているのを見て、ジャカルタ都市圏の発展と、中間～富裕層の増加を感じた。多くの建設中のビルや公共交通機関を見て、今後のジャカルタの発展を楽しみに思い、近い将来にまた訪れたいと思った。

私はこのプログラムで他にも多くのことを学んだ。例えば、インドネシアの伝統文化である。私はインドネシアの伝統文化に全く無知だったが、本プログラムの午後の授業の文化体験を通して様々な伝統文化に触れることができた。日本でインドネシアの伝統文化に触れる機会は少ないため、実際に伝統文化を体験できたのは貴重な経験だった。また、インドネシア語の授業もとても楽しかった。初めて勉強する言語だったため、日に日に知っている語彙や表現が増えてインドネシア語を話せるようになるのが実感しやすく、授業に積極的に参加することができた。また、現地の人とインドネシア語でコミュニケーションが取れた時は、語学学習の楽しさを感じ、もっと会話できるようになりたいという学習へのモチベーションにもつながった。2週間という滞在の中でインドネシア人と毎日一緒に過ごすことで、インドネシア人の習慣や価値観も知ることができた。その中でも特にイスラム教に基づくものが多かった。私はイスラム教について教科書上のことしか知らなかったため、教科書には載っていない習慣や考え方や教科書とは違ったものを色々教わって、自分がイスラム教やインドネシアについて無知だったことを実感した。それと同時に、異文化を知るためには、どんな勉強をするよりも、異文化に直接触れることが最も重要だということを改めて思い知った。また、異文化に対する無知は時として失礼になるため、インドネシアに限らず他の国の文化にも積極的に触れて、異文化に対する理解を広げることが大切だと思った。

このプログラムでは UI の生徒にとっても感謝している。彼らは春休みではなく普段は授業があるにもかかわらず、空いている時間のほとんどを私たちのために使ってくれた。私たちが大きなトラブルに巻き込まれることなく、楽しくて充実した生活を送れたのは彼らの支えがあったからである。2 週間という限られた時間ではあったが、彼らと過ごした楽しい時間は一生の思い出である。UI の生徒との仲は今後とも大切にしていこうと思う。また、今後もインドネシア語の勉強を続けて、再びインドネシアに行ったときは、インドネシア語で感謝の気持ちを伝えられるようになれたらいいなと思っている。

将来の進路について、私は建築士として海外（主に東南アジア）の発展や開発に携わりたいと漠然と考えていたが、このプログラムを通して、ぜひいつかインドネシアの発展と開発にも従事したいと思った。渋滞や洪水、人口過密といった問題を抱えるジャカルタの生活環境の改善や、ジャワ島以外の都市の発展に建築士として携わることが今の私の将来の夢である。

多文化共学短期〔派遣〕留学プログラム 2019年度実施報告書

タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール  
ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール  
インドネシア大学スプリングスクール

令和2年(2020)年3月発行

編集・発行 京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)  
京都大学国際高等教育院 (ILAS)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
電話 (075) 753-5678

印刷・製本 株式会社 あおぞら印刷  
電話 (075) 813-3350